

美術科教育学会通信 No.119 2025 年 6 月 20 日

□巻頭言 □第 13 期理事監事一覧 □前代表理事退任挨拶 □理事会・総会報告 □第 13 期（2025-27 年度）選出理事協議会報告 □2024 年度収支決算書 □2025 年度予算書 □第 22 回『美術教育学』賞選考報告 □第 22 回『美術教育学』賞受賞者の言葉 □学会誌 47 号投稿案内 □造形芸術教育協議会報告 □教科教育学コンソーシアム報告 □2024 年度研究部会報告 □2024 年度リサーチフォーラム報告 □リサーチフォーラム案内 □書評 □新刊案内 □第 48 回東京（早稲田）大会予告 □本部事務局より

巻頭言 Introduction

私たちの学会 The Society as Ours

代表理事 佐藤賢司（大阪教育大学）

President : Kenji SATO, Osaka Kyoiku University



はじめに

第 13 期の代表理事に選出されました佐藤賢司です。12 期では美術教育学叢書企画編集委員長として、11 期では総務担当の副代表理事として、学会の活動にかかわらせていただきました。

前期代表理事の直江俊雄先生、前々期の山木朝彦先生はじめ、歴代代表理事の学会運営の力量には遠く及びませんが、非力ながらもこれからの 3 年間、精一杯務めさせていただきます。会員のみなさま、どうぞよろしくお願いいたします。

民主的なコミュニティとしての美術科教育学会

美術科教育学会の歴史は、1978 年に広島で開催された第 17 回大学美術教育学会において、鈴木寛男先生、大勝恵一郎先生が、美術科教育専門の研究会結成を呼びかけ、翌 1979 年 3 月に「第 1 回美術科教育研究会」を開催したのがはじまりです。今の学会から見れば、やや少なくとも見える第 1 回の「30 人ほどの参加者」は、それでも当時は「予想外に 30 人も」ということであったようです。

1999 年 3 月に発行された『美術科教育学会 20 年史』をみると、発足当時の学会がいかに熱気にあふれた場所であったのかが分かります。また、権威や学閥から距離を置く、民主的な姿勢も発足時からの性格だったようです。掲載された鈴木寛男先生の回想によると、研究会結成の呼び掛け人であった鈴木先生と、大勝先生、そして大野元三先生の三名が同窓（東京美術学校・東京芸大）であったことから、系列的な組織とみられる

ことを心配したとあります。しかしその心配は杞憂に終わったようで、「幸いその後さまざまな系列の人が参加されたので、この心配はなくなりました」と書かれています。ここからは、学閥を嫌い、自由で開かれた研究会を志向されていたことが分かります。その後 1991 年から役員選挙が実施されるようになり、徐々に現在のような体制が整ってきました。

もちろん、この間には、様々紆余曲折もあり、時には激しい議論も交わされたことは想像に難くありません。前出の『20 年史』の多くの寄稿を読んでも、けっして単純に一つの方向だけを向いていたのではなく、会員一人ひとりにとっての学会の存在意義も、実に多様なものであったことが分かります。

このことは、とりもなおさず、会員の意思を尊重した、柔軟な運営こそが、本学会の特徴であったことを示すものであり、そしてこのことが、今に引き継がれる本学会のよさでもあるのでしょう。

学会である以上は、学術的な研究成果の発信が最も重要な使命であることは当然ですが、そこに集う私たちは、それぞれの自由な意志を持って日々の研究や教育実践に取り組んでいる一人ひとりです。このことが尊重されてこそその学会でなければなりません。

励ましてくれた学会・・・私事を少し

若手にとっての学会の存在に関して、そして人を支える学会という存在に関して、個人的な思い出を一つだけ記させていただきます。

今は解散しましたが、本学会には「工作・工芸領域部

会（のちの「工作・工芸領域研究部会」）が存在していました。この部会の創設に深くかかわった身として、当時の―今も続く―学会の懐の深さと、若手を励ます性格には、心から感謝しています。それは今の私自身の在りようを支えてくれたものでした。

1994年9月の『学会通信14号』に「研究部会について」という記事が載りました。同年8月の理事会で確認された会則等が掲載されたものですが、そのページの下に、次のような短い文章が載っていました。

『研究部会』設立申請のための書式・用紙をつくりました。ご希望の方は事務局までお申し出ください。規程のようなものを記しますと大仰になりますが、普段着の研究会が部会だと思います。若い会員の行動的なエネルギーに期待しています。様々な提案を心待ちにしています。」

当時の私は、大学院を修了し、染色・テキスタイルの作品を制作発表しながら、その過程で突き当たった、明治期の工芸概念形成の非一正史的な側面や、当時熱を帯びていた造形作品として工芸再考の動きなどへの強い関心を持っていました（それはとりもなおさず自分自身の制作研究＝生き方を定める方向づけの思考でもありました）。指導教員であった西村俊夫先生のもと、現状の工芸教育（とそれを語る言説群）への疑問・関心を深めていた私にとって、入会したてのこの学会の「研究部会」は非常に魅力的に見えました。

そこで早速事務局に設立の書式を送っていただきたいと連絡したのですが、すぐに用紙を送っていただいただけではなく、同年12月の『学会通信15号』の「部会関連情報」に次の記事が載っていました。

「佐藤賢司会員から『学会通信14号の研究部会についてですが非常に興味を持っています。ついては設立のための用紙をお送りください』という嬉しい連絡をいただきました。規約では、部会の代表が原則的に学会役員もしくは役員経験者になっていますが、その点については柔軟に対応したく思いますので、若手会員からの積極的な提案を心待ちにしています。」

本部事務局で通信を作成されていた柴田一豊先生によると推察される文章ですが、私はこの時、柴田先生とは面識がありませんでした。当時の理事の先生方の教え子でもなく、人脈とはまったく無縁の20代の一会員の行動を、このように気にとめて、励ましていただいたことに、どれほど勇気づけられたことか…。

その後、西村俊夫先生のお力を得て部会は設立され、たくさんの仲間とともに、大会での部会発表や部会通信の発行など、数年間、力いっぱい活動することができました。

面識のなかった島根大学の猿田量先生が、部会発表に関心を持って下さり、部会通信にゼミ生の寄稿を勧めてくれたことなど、思い出は尽きません。数年後に

は、宮脇理先生、山木朝彦先生のお力添えで、新たな視点でのリサーチフォーラムを開催するなど、広がりを持って活動できたことは私の財産となりました。

そのきっかけは、やはり部会設立を励ましていただいたことに始まります。今でも感謝の念を抱き続けています。

多様な価値観を尊重し、励ます場としての学会

今、教科教育研究は大きな岐路に立っています。学会設立の時期以降、各地で教育研究の重要な役割を担ってきた大学院の多くが、教職大学院へと様変わりしました。そこでの研究の射程や範囲は、かつての研究科のそれとは大きく異なっています。

特化した職能を短期間で伸長する養成機関の必要性を否定するつもりはありません。しかし、研究には、対象（＝私たちでいえば美術教育）を可能な限り広義に捉えた、より多様な視点からのアプローチと、それを共有し議論できる環境が欠かせません。それが無ければ、私たちは自らの研究という「図」を、広大な文化的「地」に布置する視点を失ってしまい、その結果、美術教育はどんどん目先の方法論の世界に閉じていってしまうでしょう。

もちろん、大学院の修士課程や博士課程のみが研究の場ではありません。教育研究は、いわゆる専門職としての狭義の研究者に限定されるものではなく、様々な校園種や社会教育の場などで日々実践に取り組む方々や、制作研究に取り組む方々すべてが研究者と言えるでしょう。教育研究の多くの場合、実践者が同時に研究者でもあるからです。

前代表理事の直江俊雄先生が、通信前号の巻頭言で『研究者』とは研究論文を発表したかどうかにかかわらず、本学会の会員として活動している仲間をすべてそう呼んでいます。」と述べられた通りです。

2025年3月の岡山大会での美術教育史研究部会の中で、金子一夫先生は、学会の機能として「これまで個々の大学院が担ってきた研究者養成的側面をより協同して実施すること」が必要だと主張されました。まさに学会に求められるもっとも重要な役割であると思います。

私たちの学会は、会員のみなさんの（そしてこれからの会員となってくれるみなさんの）、それぞれ異なる問題意識や関心、そして価値観を尊重し、互いにその研究を認め、励まし、高めあえる場であり続ける必要があります。

みなさんの、特に若手の会員の柔軟な発想・提案で、学会がより活性化していくことが望まれます。

これからもこの先も、美術科教育学会が私たちにとって大切なコミュニティであり続けられるよう、みなでお互いを支え合いたいと思っています。学会は、私たちのものだからです。

第13期（2025-2027年度） 理事・監事一覧

Board of Directors for the 13th Period (Fiscal Year 2025-2027)

代表理事 佐藤賢司（大阪教育大学）

氏名 Name	所属 Affiliation	担当 Role in the Board
佐藤 賢司 Kenji SATO	大阪教育大学 Osaka Kyoiku University	代表理事 教科教育学コンソーシアム理事 President
竹内 晋平 Shimpei TAKEUCHI	奈良教育大学 Nara University of Education	副代表理事（総務部）事務局長（庶務・会計・規約） Vice President: General Affairs Department
池田 史志 Satoshi IKEDA	広島大学 Hiroshima University	副代表理事（研究部）学会誌編集委員長 Vice President: Research Department
大泉 義一 Yoshiichi OIZUMI	早稲田大学 Waseda University	副代表理事（事業部）リサーチフォーラム統括 Vice President: Social Activities Department
手塚 千尋 Chihiro TETSUKA	明治学院大学 Meiji Gakuin University	理事（総務部）事務局（Web管理） Director: General Affairs Department
内田 裕子 Yuko UCHIDA	埼玉大学 Saitama University	理事（総務部）事務局（会計管理 選挙関連規定） Director: General Affairs Department
佐藤 絵里子 Eriko SATO	弘前大学 Hirosaki University	理事（総務部）事務局（学会通信） Director: General Affairs Department
渡邊 美香 Mika WATANABE	大阪教育大学 Osaka Kyoiku University	理事（総務部）事務局（会員管理 国際局連携） Director: General Affairs Department
直江 俊雄 Toshio NAOE	筑波大学 University of Tsukuba	理事（研究部）学会誌編集副委員長 Director: Research Department
赤木 里香子 Rikako AKAGI	岡山大学 Okayama University	理事（研究部）学会誌編集委員 教科教育学コンソーシアムジャーナル編集委員 Director: Research Department
宇田 秀士 Hideshi UDA	奈良教育大学 Nara University of Education	理事（研究部）学会誌編集委員 美術教育学叢書企画編集委員長 Director: Research Department
郡司 明子 Akiko GUNJI	群馬大学 Gunma University	理事（研究部）教科教育学コンソーシアム研究推進委員 Director: Research Department
西村 德行 Tokuyuki NISHIMURA	東京学芸大学 Tokyo Gakugei University	理事（研究部）学会誌編集委員 美術教育学賞選考委員長（R7） Director: Research Department
藤井 康子 Yasuko FUJII	大分大学 Oita University	理事（研究部）教科教育学コンソーシアム研究推進委員 Director: Research Department
清田 哲男 Tetsuo KIYOTA	岡山大学 Okayama University	理事（研究部）学会誌編集委員 Director: Research Department
村田 透 Toru MURATA	滋賀大学 Shiga University	理事（研究部）学会誌編集委員 Director: Research Department
牧野 由理 Yuri Makino	埼玉県立大学 Saitama Prefectural University	理事（研究部）学会誌編集委員 Director: Research Department
神野 真吾 Shingo JINNO	千葉大学 Chiba University	理事（事業部）リサーチフォーラム 芸術学関連学会連合 Director: Social Activities Department
丁子 かおる Kaoru CHOJI	和歌山大学 Wakayama University	理事（事業部）リサーチフォーラム 教育関連学会連絡協議会 Director: Social Activities Department
中村 和世 Kazuyo NAKAMURA	広島大学 Hiroshima University	理事（事業部）国際局長 Director: Social Activities Department
三澤 一実 Kazumi MISAWA	武蔵野美術大学 Musashino Art University	理事（事業部）リサーチフォーラム 全日本美術教育会議 Director: Social Activities Department
山木 朝彦 Asahiko YAMAKI	鳴門教育大学（名誉教授） Naruto University of Education	理事（事業部）リサーチフォーラム 国際局 Director: Social Activities Department
栗津 謙吾 Kengo AWAZU	成城学園初等学校 Seijo Gakuen Elementary School	理事（事業部）リサーチフォーラム Director: Social Activities Department
北野 諒 Ryo KITANO	高知大学 Kochi University	理事（事業部）リサーチフォーラム Director: Social Activities Department
水島 尚喜 Naoki MIZUSHIMA	聖心女子大学 University of the Sacred Heart	監事 Auditor
金子 一夫 Kazuo KANEKO	茨城大学（名誉教授） Ibaraki University	監事 Auditor

前代表理事退任挨拶

Message from the Former Representative Director



前代表理事 直江俊雄（筑波大学） Former Representative Director : Toshio NAOE, University of Tsukuba

1. 「自分創造プロジェクト」振り返り

私たち第12期理事会の任期中、多くの会員の皆様のご協力により、運営を進めてくることができました。心より御礼申し上げます。

美術科教育学会「自分創造プロジェクト」自己点検表（案）

過去3年間を振り返ってみましょう。

①脱ROM（脱・読むだけ会員）に向けて：学会誌投稿や研究発表

☐ 投稿または発表できた ☐ 研究を進めた ☐ 研究の構想を温めた ☐ 研究を始めたいと思った ☐ その他

②学会を自分の成長の場として使えたか：

☐ 大会 ☐ リサーチフォーラム ☐ 研究部会 ☐ 出版物（学会誌、叢書、通信他）の情報 ☐ 運営参加 ☐ その他

就任時の学会通信で私は、「この3年間は、学会を自分の成長のために、今までより、もっと使う期間として、活用してみませんか。」「私たちの任期が終わる3年後、自分創造プロジェクトと学会の成長の姿をどう示せるか、ともに振り返ってみましょう。」と提案しました（美術科教育学会通信 No. 110）。

私個人のことを振り返りますと「①脱ROM（脱・読むだけ会員）に向けて」では、会員の皆様に奨励しておきながら、本学会の学会誌への投稿までは到達せず、「研究を進めた」ところまでだったことを正直に反省いたします。なお、本学会が参加する教科教育学コンソーシアムの論文誌には、[言語学研究者との共同研究](#)を発表しました¹⁾。（各教科の枠を超えた研究にご関心のある方は、同論文誌への投稿をお考えになるのもよいと思います。）

「②学会を自分の成長の場として使えたか」では、すべての項目にチェックを付け、もし5段階評価があるならば多くの項目で最高点に丸をつけたいと思います。特に大会では、「代表理事だから」という言い訳で、ほぼ全ての発表を拝見してまわり、また各研究部会の活発な議論の中に入れていただいたことなどを通して会員の皆様の熱気に触れることになり、研究者が相互啓発する場の大切さをあらためて認識しました。

皆様は、いかがですか。思い通りではなかったとしても、また次の3年、あるいは10年、20年先を目指しても結構です。「私の成長が美術教育の成長だ」くらいに思って、取り組まれてはいかがでしょうか。

2. 「学会創造プロジェクト」は？

それでは組織としての「学会の成長の姿」は示すことができたでしょうか。私の就任時のメッセージでは、すべての活動は「①会員による研究の取り組みをしっかりと支援していくこと」「②次の世代の研究者の育成」の2点に焦点を当てて着実に進めたいと述べました。その改革は「道半ば」だと思います。皆様の実感ではいかがでしょう。今後も「会員の皆様の成長＝学会の成長」となる姿を目指して、微力ながら貢献できればと思います。

「学会創造プロジェクト」点検表（案）

①会員による研究の取り組みを支援できたか：

5・4・3・2・1

②次世代の研究者を育成できたか：

5・4・3・2・1

5 とてもよくできた

4 よくできた

3 ある程度できた

2 あまりできなかった

1 ほとんどできなかった



佐藤新代表へバトンタッチ！

1) 直江, 竹本, 新山, 澤田「高校生によるアートライティングの言語的特性 指示詞と体言止めによる体験共有への志向をめぐって」『教科教育学コンソーシアムジャーナル』2024年2巻1号 pp.31-44 <https://doi.org/10.60199/jicospa.2023J003>

2024 年度 第 2 回理事会・総会・第 3 回臨時理事会報告

Report on the Board of Directors Meeting and the General Assembly for the Fiscal Year 2024

本部事務局 相田隆司（東京学芸大学） 吉田奈穂子（筑波大学）

美術科教育学会 2024（令和 6）年度 第 2 回理事会議事録

2024 年度第 2 回理事会は、2025 年 3 月 21 日（金）15 時 00 分から 18 時 30 分まで、対面（岡山大学教育学部講義棟 2 階 5206 講義・演習室）およびオンライン（ZOOM）併用のハイブリットにて開催された。

理事会冒頭、直江俊雄代表理事から開会挨拶が行われた。その後、理事の定足数の確認が行われた。本会には理事が 17 名出席し、欠席者からの委任も含め理事会成立条件が満たされていることが確認された。議事録担当として事務局の吉田奈穂子が同席した。議事の進行は相田隆司副代表理事が務めた。



【審議事項】

I 総務部関連

1. 新入会員及び退会者の承認について

本部事務局員の吉田より資料に基づき、新入会員申込者 12 名、退会・退会予定者 15 名について説明がなされた。審議の結果、原案通り異議なく承認された。2025 年 3 月 10 日時点の会員数は 658 名と 4 団体、うち正会員は 625 名、学生会員は 33 名、賛助会員は 4 団体となった。また学生会員のうち学部生は 6 名、大学院生は 23 名、教職スタートアップ利用者は 4 名である。

2. 2024 年度収支決算報告

相田副代表理事より 2024 年度収支決算報告について説明がなされた。加えて、福本謹一監事より 2025 年 3 月 7 日に行われた会計監査の結果が報告された（長田謙一監事と福本監事、直江代表理事、相田副代表理事、支局の担当者が出席）。2024 年度収支決算報告は審議の結果、原案通り異議なく承認された。

3. 2025 年度会計年度予算案

相田副代表理事より 2025 年度会計年度予算について説明がなされた。宇田秀士理事より予備費の額についてご指摘があったが、今後、学会の国際化などに向けた取り組みを通して、会員に還元する形を模索していくことが確認され、審議の結果、原案通り異議なく承認された。

4. 役員選挙結果の報告および推薦理事に関する承認について

竹内晋平選挙管理委員長兼理事より、第 13 期の役員選挙結果が報告された。投票率は 25.3%であった。役員選挙の結果、赤木里香子氏、池田吏志氏、宇田秀士氏、大泉義一氏、郡司明子氏、佐藤賢司氏、神野真吾氏、竹内晋平氏、丁子かおる氏、手塚千尋氏、直江俊雄氏、中村和世氏、西村德行氏、藤井康子氏、三澤一実氏の計 15 名が理事に選出された。推薦理事候補については佐藤賢司理事より報告がなされた。渡邊美香氏、内田裕子氏、佐藤絵里子氏、清田哲男氏、村田透氏、牧野由理氏、山木朝彦氏、栗津謙吾氏、北野諒氏の計 9 名が推薦された。審議の結果、理事会で異議なく承認された。

また、竹内理事より、役員選挙に関連する次期への申し送り事項として、①現在の選挙に合わせた規程に修正すること、②年齢以外の理由で辞退する場合についての検討、③選出理事会を欠席する場合の委任状等の扱いについての規程の改訂が提案された。

5. 第48回次期大会について

大泉義一副代表理事より来年度の東京（早稲田）大会の実施案について資料を基に提案がなされた。2026年3月14日（土）、15日（日）に開催予定で、口頭研究発表に加え、国際局の企画や実行委員会企画を計画中であることが提案された。審議の結果、異議なく承認された。

6. 研究部会関連

相田副代表理事より各研究部会の2024年度決算報告書と今年度継続申請が必要な授業研究部会及び美術教育史研究部会、乳・幼児造形研究部会の継続申請について報告があり、審議の結果異議なく承認された。

7. 学生会員に関する申し合わせ改訂

直江代表理事より、学生会員に関する申し合わせの改訂について資料を基に提案がなされた。「在学中に教職へ就職した場合は、大学院を修了した時点から1年間、学生会員としての資格を継続することができる」という文言を教職スタートアップに追記することが提案され、審議の結果、原案通り異議なく承認された。

8. 美術科教育学会国際化推進構想について

直江代表理事より美術科教育学会国際化推進構想について、①InSEAとの連携を今後も継続していくこと、②国際学会誌等積立金を活用した海外研究者の講演者の招聘等について、③英語発表枠の設定や国外会員の参加促進についての3点の提案があった。また関連して、手塚理事より学会ウェブサイトからのオンライン入会申込書についても提案がなされた。

審議に際しては、①に関して、宇田理事より日本在住のInSEA会員と海外居住のInSEA会員への対応の相違について質問があり、直江代表理事より居住地に問わず学会の参加費の割引を受けられるようにする方針であることの回答があった。続いて、山本朝彦理事および水島尚喜理事より日本美術教育連合と連携して進め方を決める必要があるのではないかというご意見があった。審議の結果、InSEAとの連携については連合と意思疎通を図った上で進めていくことが確認され、異議なく承認された。②に関しては、国際学会誌等積立金を大会やリサーチフォーラムなどに招聘する招聘者への旅費や謝金などで使用できるようにしていく方向性が確認され、審議の結果異議なく承認された。③に関しては、英語発表枠の設定や国外会員の参加促進について、また、会費のクレジット払いに関しても、導入に向けて準備を行うことで異議なく承認された。英語発表枠の導入に伴い、大会発表規則の改訂案が承認された。

●美術科教育学会大会発表規則改訂箇所

現行	改訂後
(使用言語) 第5条 大会発表の使用言語は、原則として日本語とする。日本語以外で発表する場合は、発表者の責任で日本語の通訳を付ける。	(使用言語) 第5条 大会発表の使用言語は、原則として日本語とする。日本語以外で発表する場合は、発表者の責任で日本語の通訳を付ける。 ただし、当該大会の大会運営事務局が希望する場合には英語での発表枠を設け、日本語の通訳を省略することができる。
(発表申込み方法) 第9条 大会発表の申込みは、大会運営事務局が定める方法によって行う。 (発表申込書の形式及び内容) 第10条 発表申込書には、(a)発表者名、(b)所属機関/職名(院生の場合は年次等)、(c)発表題目、(d)連絡先(住所、電子メールアドレス、TEL/FAX)、(e)使用機器、(f)連絡事項欄等を設ける。	(発表申込み方法) 第9条 大会発表の申込みは、大会運営事務局が定める方法によって行う。 (発表申込書の形式及び内容) 第10条 発表申込書には、 (a)発表者名、(b)所属機関/職名(院生の場合は年次等)、(c)発表題目、(d)連絡先(住所、電子メールアドレス、TEL/FAX)、(e)使用機器、(f)連絡事項欄等を設ける。 以後、第11条を第10条に繰り上げる。

9. 総会案について

相田副代表理事より、2024 年度の美術科教育学会総会の次第について資料を基に提案がなされ、審議の結果、原案通り異議なく承認された。

【報告事項】

1. 美術教育学叢書第4号・第5号の刊行について

佐藤理事より叢書第4号・第5号の刊行について報告がなされた。

2. 叢書発行部数等について

相田副代表理事より、叢書1～3号の発行部数と学会の支出、収入について報告がなされた。

II 研究部関連

【審議事項】

1. 『美術教育学』賞の選考結果について

佐藤理事より『美術教育学』賞の選考結果について報告がなされた。美術教育学賞は該当なし。奨励賞には、小口あや氏「教師の美術体験に根ざした美術科授業づくり方法論—教育内容の形成と変容—」が推薦された。選考結果について審議を行った結果、異議なく承認された。

○『美術教育学』賞：該当なし

○『美術教育学』賞奨励賞：小口あや「教師の美術体験に根ざした美術科授業づくり方法論—教育内容の形成と変容—」

小口あや論文は、美術科の教科特性において、指導者の美術体験がどのように授業に関係しているかについて「①教師の美的体験とはどのようなものか」「②教師は美術科授業づくりにおいて、被教育者や状況を意識しつつ、教育内容、教育活動をどのように形成していくのか」という点を通じて、実践から得た知見を他の研究と関連付けて理論化したものである。教育内容などを決定する際の、美術教師の思考方法の形成に、この「教師の美術体験」がどのようにつながっていくのかが丁寧に論じられていたことが評価された。

*『美術教育学』賞選考委員会

ア号委員 佐藤賢司

イ号委員 直江俊雄（代表理事）

ウ号委員 大泉義一（学会誌編集委員長）

エ号委員 竹内晋平（選考委員長推薦の理事）

山木朝彦（選考委員長推薦の理事）

オ号委員 村田透（学会誌編集委員長推薦の会員）

和田学（学会誌編集委員長推薦の会員）

なお、劉栓栓氏・緒方思源氏による「中学校の美術鑑賞における省察能力の育成につながる外的視点—グループ内の他者の視点から対話型AIの視点へ—」と市川寛也氏、庄司知生氏「工芸ワークショップを通じた実践共同体の構築の可能性—アートプロダクト《生活者工房》の取り組みを踏まえて」も、高い評価を得たことが報告された。関連して、宇田理事より選考結果の審議時期を早める必要があるのではないだろうかご提案があった。今後の研究部で審議スケジュールを検討することが確認された。

2. 『美術教育学-美術科教育学会誌』第46号の編集について

大泉副代表理事より、論文以外の投稿（書評、論説、実践報告）への対応についてと、第46号の投稿状況が報告された。

3. 次年度『美術教育学-美術科教育学会誌』第47号スケジュールについて

大泉副代表理事より、次回9月1日（月）17時を締め切りにする旨、提案がなされた。その後、9月6日あるいは7日に研究部会議と理事会を実施する旨確認し、審議の結果異議なく承認された。

4. 三学会の学会誌投稿論文規程等の共通化について

大泉副代表理事より、三学会の学会誌投稿論文規程等の共通化に伴って、「投稿論文作成の手引き」の改訂が必要である旨、報告がなされ、資料をもとに改訂案が示された。次期の研究部会で継続して審議が行われることが確認され、審議の結果、異議なく承認された。

5. 『美術教育学賞』の発展的解消と新たな賞の創設について

山木理事より『美術教育学賞』の解消と新たな賞の創設について提案がなされた。現在実施している若手研究者育成のための『美術教育学賞』を次回実施後に廃止し、新たな賞を創設することについて審議がなされた。新たな賞の詳細については今後も理事会で継続的に検討を進めることが確認され、審議の結果、その方向性について異議なく承認された。

【報告事項】

1. 学会誌の即時オープンアクセス方針への対応について

竹内理事より学会誌の即時オープンアクセス方針への対応について、資料をもとに報告がなされた。公的資金のうち、2025年度から新たに公募を行う競争的研究費の成果報告が即時オープンアクセスの対象になる。対応については次年度の研究部において、投稿規程の検討等が必要であることについて確認がなされた。

2. 岡山大会『論文投稿ランチカフェ』の実施について

大泉副代表理事より、岡山大会で『論文投稿ランチカフェ』を開催する旨報告がなされた。

3. 論文執筆者への学会誌送付数に関する会員からの問い合わせ

大泉副代表理事より、執筆者に3部送っていた学会誌が1部になっていることについて会員から問い合わせがあったことが報告された。次期の研究部編集委員会で経緯を確認し、今後の送付数を引き続き検討していくことが確認された。

Ⅲ 事業部

【審議事項】

1. 国際局関係

中村理事より InSEA 学会発表支援事業の継続について提案があった。審議の結果、異議なく承認された。また、InSEA 団体会員費を支払い済みであることと、第 47 回世界評議員のアニター・シナー教授による講演会とコロンビアのポゴダ現代美術館の教育研究主任のスザナ・バルガス＝メヒア氏によるワークショップを岡山大会では開催予定であることが報告された。関連して、宇田理事より InSEA 学会発表支援事業について学会員へ再度呼びかけを行うことが提案された。

【報告事項】

1. 全日本美術教育会議について

三澤副代表理事より全日本美術教育会議について、次期学習指導要領改訂に向けての提言作成のスケジュールについて報告がなされた。4月中旬を目途に提言が出される予定であることが確認された。

2. 造形芸術教育協議会について

直江代表理事より第 16 回と 17 回の議事録をもとに造形芸術教育協議会の協議内容について報告がなされた。

3. 教育関連学会連絡協議会

水島理事より、2025 年 3 月 8 日に実施された第 13 回教育関連学会連絡協議会総会について報告がなされ、会費年額が半額になったこと等が報告された。また、総会と同日に行われた「日本における教育学研究の国際化の現状と課題」についてはアーカイブが後日学会ウェブサイトにて公開される旨、報告がなされた。

4. リサーチフォーラムについて

三澤副代表理事より 2 月 23 日に鳥取県立美術館において朝鑑賞シンポジウム「安心安全な学校づくり 朝鑑賞のシンポジウム」が開催され、全国からオンラインも含め 200 名ほどの参加があったことが報告された。

5. 教科教育学コンソーシアム

直江代表理事より教科教育学コンソーシアムについて報告がなされた。教科教育学コンソーシアムによる『教科教育学研究ハンドブック（仮称）』の著者について、理事からの推薦を受け付ける旨、報告がなされた。

6. 「学会と行政の対話的關係の形成」について

直江代表理事より、資料を基に永守理事による美術教育界の対話的關係の形成に関する提案について報告がなされた。

以上

.....

美術科教育学会 2024 年度 総会議事録

日時：2024 年 3 月 22 日（土）14 時 10 分～15 時 00 分

場所：対面（岡山大学創立五十周年記念館）

2024 年 3 月 22 日（土）14 時 10 分より、岡山大学創立五十周年記念館において総会が開かれた。直江俊雄代表理事の挨拶の後、相田隆司副代表理事より推薦があり、西村德行理事が議長に選出され、議事進行を担当した。議事に先立ち、相田副代表理事より、総会委任状の提出数が 165 件であったことが報告された。

【審議事項】

1. 次年度理事承認

佐藤賢司理事より次年度理事が紹介され、審議の結果異議なく承認された。詳細は理事会資料参照。

2. 2024 年度収支決算報告

相田副代表理事より 2024 年度収支決算が資料を基に説明され、福本謹一監事より監査結果の報告がなされた。審議の結果異議なく承認された。

3. 2025 年予算案

相田副代表理事より 2025 年予算案が資料を基に説明され、審議の結果異議なく承認された。

4. 国際学会誌等積立金について

直江代表理事より国際学会誌等積立金について提案がなされた。2005 年に積み立てを開始してから 20 年、活用せずに保持するだけになっている学会特別積立金の国際学会誌等積立金を学会の国際化のために使用することが提案された。海外研究者の招聘に伴う、謝金や旅費、資料作成などに使用する予定で、2 年で 50 万円前後の拠出が目安となることが補足された。審議の結果、異議なく承認された。

【報告事項】

1. 『美術教育学』賞の選考結果について

佐藤理事より『美術教育学』賞の選考結果について報告があった。

○『美術教育学』賞：該当なし

○『美術教育学』賞奨励賞：小口あや「教師の美術体験に根ざした美術科授業づくり方法論—教育内容の形成と変容」

2. 『美術教育学 第 46 号』の発刊について

大泉義一副代表理事より、書評一編の掲載が第 46 号に含まれていることが報告された。なお、今回は投稿 31 編で掲載 19 編、採択率は 61.2%。昨年度第 45 号より、投稿数は 0.78%減、前年度比 0.78%投稿数減、掲載数 0.9%減、採択率 8.7%増であったことが報告された。

3. 学会誌の学術論文 DB（EBSCOhost）収録について

池田理事より学会誌の学術論文 DB（EBSCOhost）収録について説明がなされた。収録されることにより海外の実践者や研究者が論文を閲覧する可能性が高まることが期待される。学会誌の国際的な信用を得られるというメリットがあることが説明された。

4. 事業部関連行事について

三澤副代表理事より 2 月 23 日に鳥取県立美術館において朝鑑賞シンポジウム「安心安全な学校づくり 朝鑑賞のシンポジウム」が開催され全国からオンラインも含め 200 名ほどが参加したことが報告された。

5. 次期大会について

大泉副代表理事より次期東京（早稲田）大会について案内があった。2026 年 3 月 14 日（土）、15 日（日）に早稲田大学において開催予定である。

以上の審議・報告を終え、議長より閉会が宣言された。

以上

.....

2024 年度第 3 回臨時理事会（メール審議）報告

1. 審議期間・方法

審議期間：2025 年 4 月 6 日（日）～ 4 月 11 日（金）

審議方法：電子メールによる審議

2. 審議内容

2025 年 3 月 21 日開催の 2024 年度第 2 回理事会にて、事業部からの議案「教科教育学コンソーシアムによる『教科教育学研究ハンドブック』（仮称）著者の募集について」にもとづき行われた著者の選考方法及び作成された著者案（下記※）についての理事会における審議。

3. 審議結果

審議の結果異議なく原案通り了承された。

（※）【著者の選考方法・著者案】

- (1) 選考は理事による推薦（被推薦者は理事または会員）をもとに、原案を作成し、理事会で承認を得ることとする。推薦は電子メールにて、山木コンソーシアム研究委員、池田理事、直江代表理事に同時提出（2025 年 3 月 28 日まで受付）。応募者名と所属（他薦の場合は本人の承諾を得ていること）、希望執筆箇所（ある場合）を記載。理事以外の会員を推薦する場合は、主要業績や推薦理由などを添えることを推奨。送信先アドレスは（山木、池田、直江）。山木、池田、直江により著者案を作成し、電子メールによる臨時理事会にて審議、承認を得て決定する。
- (2) 上記(1)に基づき、山木理事・池田理事より共同で 3 名の著者の推薦があり、直江代表理事が了承して理事会に提出する著者案とした。
- (3) 著者案は、手塚千尋氏、渡邊美香氏、畑山未央氏 以上 3 名である。

以上

第13期（2025-2027年度）選出理事会報告

Report on the Council of Elected Board of Directors Meeting for the 13th Period (Fiscal Year 2025-2027)

総務担当副代表理事 竹内晋平（奈良教育大学）

美術科教育学会・第13期（2025-2027年度）選出理事会は、岡山大学において2025年3月21日（金）14:00～14:40にハイブリッド形式で開催された。

佐藤賢司代表理事候補より、理事候補者の中から副代表理事・総務部担当・本部事務局長として竹内晋平理事候補、副代表理事・研究部担当・学会誌編集委員長として池田吏志理事候補、副代表理事・事業部担当・リサーチフォーラム統括として大泉義一理事候補をそれぞれ選任することについて説明がなされ、異議なく承認された。推薦理事候補者として総務部担当に渡邊美香候補、内田裕子候補、佐藤絵里子候補を、研究部担当として清田哲男候補、村田透候補、牧野由理候補、事業部・国際局担当に山木朝彦候補、同・リサーチフォーラム担当に栗津謙吾候補、北野諒候補を選出し、承認されたことについて報告がなされた。監事については、水島尚喜会員、金子一夫会員が推薦され、異議なく承認された。また、美術教育学叢書企画編集委員会委員長として宇田秀士理事候補、美術教育学賞選考委員会委員長として西村德行理事候補が推薦され、理事会の議を経て任命することについて報告がなされた。

佐藤代表理事候補より、各理事候補の役割について説明がなされたのち、出席者から自己紹介の言葉が述べられた。

2024 年度 収支決算書

Financial Statements for the Fiscal Year 2024

前本部事務局 相田隆司（東京学芸大学） 郡司明子（群馬大学）

美術科教育学会 2024会計年度 収支決算報告 2024.1.1-2024.12.31

【収入の部】				(単位:円)
項 目	予算額	決算額	摘要	
前年度繰り越し金	4,340,102	4,340,102	2023会計年度からの繰越金	
学会特別積立金から	0	0	学会特別積立金からの支援	
会費(正会員)	4,600,000	4,776,000	8,000円×597口	
会費(学生会員)	9,500	20,500	500円×41口	
会費(賛助会員)	80,000	80,000	20,000円×4社	
論文掲載料	1,100,000	824,000	2024.3刊行学会誌第45号掲載料21編	
雑収入	学会誌販売	11,100	4冊	
	叢書還元料	100,000	2023年11月～2024年10月分までの叢書売上金	
	利子・利息	100	ゆうちょ銀行、みずほ銀行	
	その他	0	第46回大会補助金残額返金	
収入の部 合計		10,240,802	10,412,987	

【支出の部】				(単位:円)
項 目	予算額	決算額	摘要	
総務事業	大会補助費	600,000	500,000	第46回弘前大会追加補助、第47回岡山大会
	学会通信作成費等	50,000	16,500	第115～117号一斉配信費
	学会HP運営費	230,000	215,113	クラウド保守費、ドメイン料金
	本部事務局運営費	10,000	824	領収書送付
	本部事務局 支局運営費(外部委託費)1	1,450,000	1,401,432	通常業務、オンライン名簿、倉庫代、個人情報管理費
	本部事務局 支局運営費(外部委託費)2	200,000	242,055	学会誌編集支援(オンライン投稿・査読システム使用料、通常業務)
	本部事務局 支局運営費(実費)	170,000	212,390	封筒・払込票・文書印刷費、会員への郵送・通信費
	会議費	10,000	3,436	理事会お茶代
	交通費	380,000	91,807	理事会
	役員選挙関連経費	200,000	215,548	有権者名簿作成送付・選挙システム使用料
	リサーチフォーラム補助費	150,000	0	
	国内学術連合会関連経費	45,000	45,000	教科教育学コンソーシアム・教育関連学会連絡協議会・藝術学関連学会連合 年会費
	事業部運営費	100,000	56,987	全日本美術教育会議参加
	叢書刊行費	430,000	0	
	叢書デザイン料	100,000	0	
	学会運営の質的改善	200,000	26,860	InSEA 年会費 2024年度
	予備費	100,000	0	
(小 計) ①		4,425,000	3,027,952	
研究	学会誌刊行費	2,300,000	2,389,090	第45号印刷・製本・梱包発送料、第44・45号J-Stage搭載
	学会誌編集費	90,000	25,200	第45号編集点検用アルバイト
	『美術教育学』賞関連経費	80,000	69,711	副賞図書カード等
	研究部会補助費	100,000	100,000	5研究部会分×20,000円
	予備費	50,000	0	
(小 計) ②		2,620,000	2,584,001	
その他	予備費 ③	220,000	70,940	ネットバンキング手数料、振込手数料
	学会活性化事業準備金積立④	0	710	積立金利息を積立
予備費(次年度繰越金) ⑤		2,975,802	4,729,384	
支出の部合計(①+②+③+④+⑤)		10,240,802	10,412,987	

2024会計年度末までの学会特別積立金	
2023会計年度末までの国際学会誌等積立金総額	2,000,000
2023会計年度末までの学会活性化事業準備金	5,527,779
2023会計年度末までの特別積立金	4,000,000
2024会計年度分の学会活性化事業準備金支出(資金移動送料含む)	0
学会活性化事業準備金の利子・利息	710
計	11,528,489

会則に基づき、預金通帳、振替受払通知書、会計証憑、会計帳簿などをもとに会計監査を行った結果、上記の通り相違なく、適切に処理されていることを認める。

2025年3月7日

監事

長田 謙一

監事

福本 謹一



2025 年度 予算書

Budget for the Fiscal Year 2025

前本部事務局 相田隆司（東京学芸大学） 郡司明子（群馬大学）

美術科教育学会 2025会計年度 予算

2025.1.1-2025.12.31 (単位:円)

〔収入の部〕		前年度決算額	予算額	摘要
項 目				
前年度繰り越し金		4,340,102	4,729,384	2024会計年度からの繰越金
学会特別積立金から		0	0	学会特別積立金からの支援
会費(正会員)		4,776,000	4,416,000	8,000円×552口
会費(学生会員)		20,500	13,500	500円×27口
会費(賛助会員)		80,000	80,000	20,000円×4社
論文掲載料		824,000	1,100,000	2025.3刊行学会誌第46号掲載料19編程度
雑収入	学会誌販売	14,800	11,100	3冊
	叢書還元料	72,862	100,000	
	利子・利息	772	100	ゆうちょ銀行、みずほ銀行
	その他	283,951	0	
収入の部 合計		10,412,987	10,450,084	

〔支出の部〕 (単位:円)

項 目	前年度決算額	予算額	摘 要	
総務＋事業	大会補助費	500,000	600,000	第48回大会補助、第47回大会補正予算分
	学会通信作成費等	16,500	50,000	第118～120号一斉配信費用、消耗品費等
	学会HP運営費	215,113	230,000	クラウド保守費用、ドメイン料金
	本部事務局運営費	824	10,000	文具、コピー代、本部事務局連絡費
	本部事務局 支局運営費(外部委託費)1	1,401,432	1,480,000	通常業務、オンライン名簿、倉庫代、個人情報管理費
	本部事務局 支局運営費(外部委託費)2	242,055	200,000	学会誌編集支援(オンライン投稿・査読システム使用料、通常業務)
	本部事務局 支局運営費(実費)	212,390	200,000	文書印刷費、会員への郵送料、通信費
	会議費	3,436	10,000	理事会、会計監査、本部事務局打合せ等
	交通費	91,807	380,000	理事会、本部事務局打合せ等
	役員選挙関連経費	215,548	0	
	リサーチフォーラム補助費	0	150,000	2025リサーチフォーラム補助費
	国内学術連合体関連経費	45,000	45,000	教育関連学会連絡協議会年会費・芸術学関連学会連合年会費・教科教育学コンソーシアム年会費
	事業部運営費	56,987	150,000	事業部関連行事運営費、造形芸術教育協議会、全日本美術教育会議分担金等
	叢書刊行費	0	1,530,000	学会叢書編集印刷費、謝礼金
	叢書デザイン料	0	100,000	学会叢書デザイン料
	学会運営の質的改善	26,860	200,000	国際局
予備費	0	100,000		
(小計)①	3,027,952	5,435,000		
研究	学会誌刊行費	2,389,090	2,300,000	第46号印刷・製本・梱包送料・J-Stage搭載
	学会誌編集費	25,200	50,000	第46号及び第47号校正作業交通費、編集補助費、学会誌編集点検用アルバイト
	『美術教育学』賞関連経費	69,711	30,000	2025.3発表第22回選考委員会交通費、副賞図書カード等
	研究部会補助費	100,000	100,000	5研究部会分×20,000円
	予備費	0	50,000	
	(小計)②	2,584,001	2,530,000	
その他	予備費 ③	70,940	220,000	ネットバンキング手数料、振込手数料等
	学会活性化事業準備金積立④	710	0	
	予備費 ⑤(次期繰越金)	4,729,384	2,265,084	
支出の部 合計(①+②+③+④+⑤)		10,412,987	10,450,084	

2025.1.1時点での学会特別積立金

2024会計年度末までの国際学会誌等積立金総額	2,000,000	2,000,000
2024会計年度末までの学会活性化事業準備金	5,528,489	5,528,489
2024会計年度末までの特別積立金	4,000,000	4,000,000
2024会計年度分の学会活性化事業準備金支出(資金移動送料含む)	0	0

2025年3月 7日

副代表理事(総務・会計担当) 相田隆司

第 22 回『美術教育学』賞 選考報告

The 18th Award for the Journal for Japanese Association of Art Education

選考委員長 佐藤賢司（大阪教育大学）

1. 2024（令和 6）年度受賞論文

●『美術教育学』賞

該当なし

●『美術教育学』賞 奨励賞

論文題目：「教師の美術体験に根ざした美術科授業づくり方法論—教育内容の形成と変容—」

小口 あや（こぐち あや）

2. 選考の概要と経過

(1) 選考委員会の構成

2024 年 3 月に、美術科教育学会「表彰規定」第 6-8 条に則り『美術教育学』賞選考委員長が理事会にて承認され、選考委員案も承認された。その後、選考委員に若干の変更があり、2024 年 9 月の理事会で、以下 7 名が承認された。

ア号委員…佐藤賢司（選考委員長）

イ号委員…直江俊雄（代表理事）

ウ号委員…大泉義一（学会誌編集委員長）

エ号委員…竹内晋平（選考委員長推薦の理事）

山木朝彦（選考委員長推薦の理事）

オ号委員…村田透（学会誌編集委員長推薦の会員）

和田学（学会誌編集委員長推薦の会員）

(2) 対象論文

選考対象論文は、『美術教育学』第 45 号(2024 年 3 月刊)に掲載され、単著の場合は執筆者、共著の場合は執筆者全員の年齢が、前年度末において満 45 歳以下である論文（「表彰規定」第 3 条）である。今回は 1978 年 4 月 2 日以降に生まれた執筆者の論文となり、投稿時の「投稿者データ」で 8 編が該当していた。

(3) 選考の方法と日程及び経緯

選考委員長が該当論文を整理し、日程調整を行った。「表彰規定」及び「表彰規定細則」に基づき、3 回の選考が行われた。

① 第一次選考（電子メールによる推薦）

各委員が、2 編程度を推薦理由書に必要事項を記入して 2024 年 10 月 20 日までに委員長まで送付した。「細則」では第一次選考で 6 編程度推薦のところ、4 編の論文が推薦された。

② 第二次選考（電子メールによる推薦）

第一次選考における各委員の推薦理由及び選考結果をとりまとめて、お互いに関覧した上で、2024 年 11 月 30 日までに第二次推薦をすることとした。その結果、3 編に絞り込まれた。

③ 最終選考

今年度も昨年度に引き続きリモート会議(Zoom)とし、2024 年 12 月 22 日に全委員 7 名が出席し開催した。協議の前に、全委員は表彰規定を確認(事前メールで確認)し、推薦の話し合いに移った。3 編の推薦論文について、推薦した委員が推薦理由を説明し、意見交換と賞候補としての妥当性を協議した。その結果、『美術教育学賞』は「該当なし」、『美術教育学賞』奨励賞候補として、小口論文を全員一致で推薦することとした。

3. 選考理由

受賞論文の概要と、選考委員会が出された意見の概略は以下の通りである。

小口論文は、美術科の教科特性において、指導者の美術体験がどのように授業に関係しているかについて、「① 教師の美術体験とはどのようなものか」「② 教師は美術科授業づくりにおいて、被教育者や状況を意識しつつ、

教育内容、教育活動をどのように形成していくのか」という点を通じて、実践から得た知見と他の研究とを関連付けて理論化したものであり、その論は、筆者自身の授業づくりの分析から導き出したものであった。授業づくりにおいて教師がおこなう活動は、通常は「教材研究」として説明されることが一般的であるが、当該論文においては、これを「教師の美術体験」として位置づけ、教育内容などを決定する際の、美術教師の思考方法の形成に、この「体験」がどのようにつながっていくのかが、丁寧に論じられていた。

選考委員からは、前半の先行研究の分析の適切さや、自らの実践について明確な視点でとらえていること、さらに、一貫した論理展開により本論の中心課題をぶれることなく追求するができた点などが評価された。また、美術科という限られた教科の授業づくりを対象にしながらも、論文最終では、「美術体験が美術の授業づくりのためだけではない」として意味付けられている点も、今後の更なる論理の展開と深まりを予感させるものとして評価された。なお、本テーマでの研究をさらに進めるためには、当該論文において報告されている美術館での鑑賞指導に加え、表現の指導等も含んだ複数の実践について検討することが有効であると思われ、今後の継続研究への希望・期待も示された。

今回受賞には至らなかったが、以下の2編の論文も、最終選考に推薦された。

・「中学校の美術鑑賞における省察能力の育成につながる外的視点—グループ内の他者の視点から対話型AIの視点へ—」 劉栓栓・緒方思源

・「工芸ワークショップを通じた実践共同体の構築の可能性—アートプロダクト《生活者工房》の取り組みを踏まえて—」 市川寛也・庄司知生

劉・緒方論文は、極めて今日的かつ重要な問題意識のもと、日本と中国の両国の鑑賞教育の現状を比較しつつ、省察的視点の活用の可能性について、今後の展望と課題点を考察したもので、対話型AIと正面から向き合い、教育実践へとつながる有意義な論点を示すとともに、AI利用に際する留意点（限界）も冷静に示しているなど、今後の研究に対する示唆を提供した点が評価された。

市川・庄司論文では、核心部分となる「金ヶ崎芸術大学校」の《生活者工房》というアートプロジェクトについての観察と分析・評価、および対象となるプロジェクト全体に対する考察の質や、地域社会における工芸などの制作や生産の状況を見る視野の広さが評価された。

上記2編の論文いずれも、今後の継続研究への期待などから、受賞に近い評価を得ていたことを申し添えたい。

第22回『美術教育学』賞 受賞者の言葉

Words from the Winners of the 22nd Award for the Journal for Japanese Association of Art Education

『美術教育学』賞

該当者なし

『美術教育学』賞 奨励賞

小口あや

教師の美術体験に根ざした美術科授業づくり方法論
——教育内容の形成と変容——



この度はこのような賞をいただき、大変光栄です。受賞のお知らせから授賞式、その後まで、多くの方からあたたかい祝福のお言葉をいただきました。その一つ一つが本当にうれしいものでした。まずはこのことについて、厚く御礼申し上げます。

本論文で軸としたのは、2022年に茨城県近代美術館で行われた「中学生のための美術館アカデミー」という、私が指導した大学生が中学生に対して行った鑑賞指導でした。これは、当時美術館に勤務していた美術の先生が発案したものでした。その先生には中学生に美術館で充実した時間を過ごしてほしいという強い思いがあったようです。その思いは、美術館の学芸員や当日中学生を引率された先生も同様にお持ちでした。この場をお借りしてこのことをお伝えできればと思います。

私がこの鑑賞指導を本論文の軸とした最大の理由は、当日に見た美術館展示室の情景がとても美しかったからです。展示室には、作品を鑑賞する生徒と生徒に寄り添いながら丁寧に鑑賞指導する学生の姿がありました。それは、この世界に美術というものがあるということ、人が人に寄り添うということ、これらを次の世代に伝えていくことの意味を私に教えてくれているように感じました。論文執筆に行き詰まると、あの時の情景を思い起こしていました。そして、学生たちが教師になった後も美術が共にあるように、その美術体験を子どもたちにより良い形で伝えられることを願いながら書き進めました。論文執筆の力になるほどの美しい情景を作り出した生徒や学生がいたことを、ここに記させていただければと思います。

学生指導の案を立てるところから論文執筆まで、研究仲間や大学の恩師や同僚から様々にご助言や励ましをいただきました。その方たちの支えなしには書けなかった論文でした。心より感謝申し上げます。

『美術教育学-美術科教育学会誌』 第 47 号投稿案内

Call for Papers: Journal No.47

学会誌編集委員長/研究部副代表理事 池田吏志 (広島大学)

『美術教育学』第 46 号は、投稿者のみなさんの意欲的な論考とそれに対する査読者との真摯な「対話」を通して、ようやく刊行されました。皆様、本当にお疲れ様でした。第 46 号では 31 編の投稿論文のうち 19 編の論文が掲載され、採択率は 61.2%でした。昨年度の第 45 号と比べ投稿数は 0.78%減、掲載数も 0.9%の減、いっぽう採択率は 8.7%増でした。

昨今、研究成果の公開手法は多様化していますが、研究で得られた知見を研究論文としてまとめ、「未知の世界と出会う言語の行為」(小林康夫, 1998)として共有することは、学術団体としての本学会の欠かすことのできない使命であり、また学会に集う人々の喜びであると思います。

また、本学会誌の査読においては、投稿論文は大変丁寧に読み込まれ、精密な査読コメントがフィードバックされます。本学会誌への論文投稿自体が有意義な研究対話の機会であると自負しております。

ぜひ多くの方の投稿を、心よりお待ちしております。

■ 第 47 号における重点的な取り組み

1. 三学会で学会誌投稿論文規程等が共通化されました(重要!)

美術科教育学会・大学美術教育学会・日本美術教育学会では、投稿者が各学会誌に論文を投稿する際のメリットを鑑み、学会誌投稿論文規程等の共通化を行いました。具体的には、「参考文献・註の表記」ならびに「図・表の表記」の統一が行われました。昨年度(第 46 号)までの美術科教育学会の書式とは異なりますので、最新の『美術教育学』投稿論文作成の手引きをよく確認の上、指定の「論文フォーマット」を使って執筆・投稿ください。

美術科教育学会『美術教育学』の投稿に関するお知らせ：<https://www.artedu.jp/lonbunsousho/lonbun>

2. 学会誌が電子ジャーナル無料公開システムサイト J-STAGE に早期掲載されます

学会誌『美術教育学』は、第 46 号に掲載された論文から、発刊後すぐに J-STAGE 登載業務が進められ、公開されることになりました。第 47 号の投稿に向け、先行研究として積極的に活用ください。

J-STAGE ウェブサイト：<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/aaej/-char/ja>

3. 学会誌が国際的総合学術情報データベース EBSCOhost の「Education Source」に収録されます

2024 年度第 1 回理事会での承認、2024 年度総会での報告を経て、学会誌『美術教育学』が、第 47 号(2026 年 3 月刊行予定)から、EBSCOhost(エブスコホスト：国際的な総合学術情報データベース)に収録されることになりました。今後、第 48 号以降も順次掲載されていきます。掲載された論文は、海外の実践者・研究者に閲覧・引用される可能性が高まります。ぜひ奮って投稿ください。

4. 二重投稿防止等の研究倫理への取り組みと二重投稿疑義への対応に関する注意喚起(継続)

これまで、大学美術教育学会、日本美術教育学会など美術教育関連学会の諸団体と連携し、各学会誌に同一内容相当の論文が投稿されていないか、研究倫理が守られているか等の確認体制を強化してきました。投稿時には、「投稿論文の関連論文、関連著作リスト(投稿者自身の先行研究、関連研究)」を提出いただきます。

■ 投稿要領

1. 投稿資格

- (1) 単著の場合、著者が本学会の正会員または学生会員であること。ただし、学生会員のうち学部生は投稿資格を有しない。
- (2) 共同執筆の場合、筆頭著者が正会員であり、かつ当該論文著者の半数以上が正会員であること。
- (3) 正会員については、投稿時までに会費を完納していること。

2. 論文の作成

論文の作成にあたっては、美術科教育学会の諸規程を参照の上、ルールに則った投稿を心がけてください。各種規則等やフォーマットは、学会ウェブサイトからアクセス・ダウンロードできます。

- (1)「学会誌投稿規則」 学会ウェブサイト > 学会概要 > 会則・諸規程
 (2)「投稿論文作成の手引き」 学会ウェブサイト > 投稿論文募集
 (3)フォーマット 学会ウェブサイト > 投稿論文募集原稿モデル, Word 用のフォーマットなどをダウンロードできます。※リニューアルされ、使いやすくなりました！(新規)
 美術科教育学会ウェブサイト：<https://www.artedu.jp/lonbunsousho/lonbun>

3. 論文投稿受付期間

2025 年 7 月 1 日 (火) 10:00 から 9 月 1 日 (月) 17:00 まで。 *システム上, 左記期間以外は受け付けできません。

4. オンライン投稿の手順

4-1. システム利用条件

- (1)会費納入 当該年度の会費まで納付が完了していない場合、システム上で投稿を受け付けることができません。会費の入金処理には 2～3 日かかりますので、投稿までに十分余裕をもってご入金ください。
 (2)新入会者の投稿 本年度入会で投稿をご希望の方は、至急、入会申込書を送付し、本部事務局支局(ガリレオ社)にお問い合わせの上、仮の会員番号とパスワードの発行を受けてください。投稿締め切り間際での手続きですと、投稿不可となる可能性があります。

4-2. 投稿データ作成

ファイル容量が大きすぎてシステムにアップロードできない場合は、貼り付けている画像の容量を画像編集ソフト等で縮小するか、PDF ファイルの容量を縮小するなどの作業を行ってから提出してください。

- (1) 査読用原稿 Word または PDF。「投稿論文作成の手引き」、フォーマットに基づいて作成。
 (2) 図・表 原稿内に組み込めない場合には別途添付。複数ファイルは Zip フォルダ等で一つにまとめる。

4-3. 会員 ID とパスワード

投稿システムをご利用になるには、会員管理システムと同じ会員 ID およびパスワードが必要です。不明な場合は、会員管理システムか投稿システムのログイン画面《ログインできない方はこちら》ボタンより、パスワードの再設定もしくは照会手続きに進んでください。

4-4. 操作手順

学会ウェブサイトの投稿論文募集ページの最下部にある《オンライン投稿システムへログイン》のリンクをクリックし、画面に従って会員 ID、パスワードを入力してください。
 ログイン完了後、「投稿案件」の下にある《『美術教育学』第 47 巻(号) 論文投稿》をクリックしてください。
 さらに、《Option-2》の下にある《新規/追加投稿》のボタンをクリックしてください。その後、画面の指示に従って投稿データをアップロードしてください。

*「操作画面図」の入った「詳細な投稿案内」は、学会ウェブサイトでもご確認ください。

5. 掲載料

基準頁数(12 頁以内)の掲載料は、24,000 円で、12 頁を超えた場合は、1 頁につき 5,000 円の追加料金があります。また上限は 18 頁です。校正を経て頁数が確定した投稿者に連絡しますので、期日までに納入してください。おおよそ 3 月初旬に本部事務局支局担当者から行います。

6. 論文投稿後のおおよその日程

- [9 月上旬] 理事会へ受理報告, 査読委員へ査読依頼
 [10 月中旬] 査読委員からの判定結果期限(一次)
 [10 月下旬] 投稿者へ査読結果通知。上記の査読判定(一次)により「再査読」となった論文については、別の査読委員に再査読を依頼し、査読日程が約 1 か月追加されます。
 10 月下旬から 2 月末の日程は、査読結果により変わってきます。

- [3 月上旬] 編集委員会の最終校正→印刷

※なお、査読状況により、上記のスケジュールより遅れることもありますが、編集委員会で解消できるよう対策を進めて参ります。ご理解のほどよろしくお願いいたします。

■2025(令和 7)年度 第 23 回『美術教育学』賞選考について

『美術教育学』賞は、美術科教育学会の将来を拓くことが期待される清新で可能性に満ちた研究成果を称揚し、美術教育学研究の発展に寄与することを目的としています。2025 年度は、2024 年度刊行の学会誌第 46 号に掲載された論文の内、執筆者全員の年齢が 2024 年度末において 45 歳以下の方のものが選考対象となります。

造形芸術教育協議会報告

Report of the Zokei Geijutsu Kyoiku Kyogikai

前代表理事 直江俊雄（筑波大学） Former Representative Director : Toshio NAOE, University of Tsukuba

造形芸術教育協議会は、日本美術教育学会、大学美術教育学会、美術科教育学会が2010年に美術教育振興のために結成し、活動を継続してきた。2024年度は輪番で美術科教育学会が幹事となり、2回の会議が行われた。会議の要旨を以下に掲載して報告する。

第16回 造形芸術教育協議会

日時：令和6（2024）年10月27日（日）13時～15時

開催形態：オンライン（zoom）

幹事学会：美術科教育学会

出席者：6名

◆大学美術教育学会：芳賀正之（静岡大学）

◆美術科教育学会：直江俊雄（筑波大学）、三澤一実（武蔵野美術大学）、相田隆司（東京学芸大学）

◆日本美術教育学会：細谷僚一（京都デザイン&テクノロジー専門学校）、藤田雅也（静岡県立大学短期大学部）

議長：三澤一実

記録：相田隆司

議案書に沿って、以下の審議、検討、確認、意見交流がなされた。

1. 前回協議会議事録確認（直江）

出席者により、前回（第15回造形芸術教育協議会、2024.3.10）議事録の確認がなされた。

2. 各学会の現状と課題等の情報交換

（1）日本美術教育学会：代表理事 細谷・理事 藤田

日本美術教育学会は、教育をめぐる今日の状況（不登校、教員不足等々）を踏まえた組織づくりと見直しに継続して取り組んでいる。概況は以下。①当事者意識をもった会員の育成と業者委託の促進、支部間連携の推進。②ホームページのリニューアルと有効活用。③研究活動の充実（オンライン美術教育セミナー、実践研究チームの立ち上げ等）。④今後の研究大会開催予定（2024年度：静岡大会、2025年度：大阪大会、2026年度：京都大会）。⑤学会誌の充実、学会誌の発行時期の変更、投稿締切の変更（2025年度から論文投稿期限を現在の9月末から3～4か月早める予定で検討中）。⑥研究書籍の発刊。

（2）大学美術教育学会：副理事長 芳賀

大学美術教育学会では、全国美術部門と大学美術教育学会の在り方が検討され、来年度から全国美術部門の会費を無料化することとなった。現状と課題は以下。①総務局維持のための人材確保の必要性和検討。②会員数の減少（現状650名ほど）と今後の対応（会費の在り方等）。③全国大会開催地区決定と負担軽減への対応（2025年度：千葉大会、2026年度：北海道地区、2027年度：中国地区 以降未定）。

（3）美術科教育学会：代表理事 直江

美術科教育学会の概況は以下。①美術教育学叢書第4号、第5号を編集中。②学会誌論文出版後速やかにJ-Stage公開を行う（従来公開を論文誌発行から1年後としていた）。③大会について（2024年度岡山大会：2025年3月22日～23日、2025年度東京大会：2026年3月14日～15日）。岡山大会では論文投稿ランチカフェを開催し、論文投稿の基本的事項の確認等の場とすることを予定している。④InSEA大会において初めて発表する会員への発表費用の一部支援を行う事業の開始。⑤国際研究セミナーの定着に向けた取り組みの継続。⑥学生会員制度、教職スタートアップ制度について。

3. 共同連携事業の進捗確認

（1）「全日本美術教育会議」の事業推進（三澤）

三澤より、2024年10月6日、明治学院大学で開催された全日本美術教育会議設立準備大会について、参加者

は70名程度、参加団体は美術家連盟、APA（日本広告写真家協会）、教科書会社、企業、等々であったことの報告があった。

当日は、全日本美術教育会議の設立についての説明を行い、次期の学習指導要領改訂に向けた提言の骨子が提案されたとの報告があった。本会議が今後の拡張する美術教育を、企業も交えて総合的に扱いながら、情報交換の場としていく等の計画と展望が報告されたのち、次年度8月開催予定の日本美術教育学会大阪大会、あるいは9月開催の大学美術教育学会千葉大会での会議開催の可能性について意見交換がなされた。

(2) その他

細谷より、次期の学習指導要領改訂に向けた提言の「提言概要」にある「身体性と感性」の項目をめぐって、「日本的な感性」への言及の必要性について意見があった。それに対して三澤より、賛意と日本独自の感性について提言で触れていく旨の回答があった。

4. 今後の各学会の特色を活かした発展を目指すために連携事業等について

(1) 「論文の書き方講座」開催の可能性について（三澤）

三澤より、特に現場の先生方の実践論文作成のための、論文の書き方に関する講座を三学会で開催することの提案（案として講座は年間6回開催とし、各学会で2回ずつ担当する）があった。意見交換ののち、開催の可能性について各学会で持ち帰って検討を行い、次回協議会で継続協議を行うこととなった。

(2) NAEA 会員調査と会員のニーズ把握について（直江）

本議題は、本協議会終了時刻が迫っているため、次回協議会にて改めて報告と協議を行うこととなった。

(3) その他 特になし

5. 今後の造形芸術教育協議会について

以下の通り異議なく確認がなされた。

(1) 幹事学会

- ・2024年度 美術科教育学会
- ・2025年度 日本美術教育学会
- ・2026年度 大学美術教育学会

①幹事学会の任期：幹事学会の任期は、単年度とする。

②協議会の回数や日程：協議会の開催は単年度において2回（10月頃、3月頃）とする。

2024年度の協議会

- ・第16回協議会：10月中旬→令和6年10月27日（日）
- ・第17回協議会：3月中旬→令和7年3月9日（日）

以上

第17回 造形芸術教育協議会

日時：令和7（2025）年3月9日（日）13時～15時

開催形態：オンライン（zoom）

幹事学会：美術科教育学会

出席者：8名

◆日本美術教育学会：細谷僚一（京都デザイン&テクノロジー専門学校）、大橋功（和歌山信愛大学）

◆大学美術教育学会：新関伸也（東海大学）、新井浩（福島大学）、芳賀正之（静岡大学）

◆美術科教育学会：直江俊雄（筑波大学）、大泉義一（早稲田大学）、相田隆司（東京学芸大学）

議長・記録：相田隆司

<議 題>

1. 全米美術教育協会：大会、組織概況、ならびに会員調査について

直江より、2024年4月4日～6日にミネアポリスにて開催された全米美術教育協会（NAEA）の全国大会について資料提示とともに報告がなされた。報告では、会期中、多種多様な表彰が行われていること、アドビによるアプリの使い方講座の開催や企業等の出展ブースの存在、学会誌論文執筆のためのワークショップの開催、会員による作品販売ブースの存在、会の概況を説明し会員から声を聞くセッションの開催などが写真とともに

紹介された。

本大会の参加者数は、4,000名以上、約670件のプレゼンテーションとワークショップ、展示業者は約60社であった。続いてNAEAの概況について解説があった。会員数は15,956名（うち現役専門家80%、学部・大学院生8%、教職1年目4%、退職者5%等）である。NAEA会員調査の結果についても触れられ、会員に影響を与える問題領域や他の美術教育諸団体と比較したNAEAの評価等の結果についても言及があった。

その後行われた質疑応答では、協会と行政の関係に関する質問があり、他の芸術団体と一緒にロビー活動を行うよう工夫している等との回答があった。また、全日本美術教育会議の今後の在り方を考えるうえでNAEA大会の在り方は示唆に富むとの意見等があった。

＜＜次頁にスライド資料の一部を抜粋＞＞

2. 前回議事録確認

出席者により、前回（第16回造形芸術教育協議会、2024.10.27）議事録の確認がなされた。議事録記載の3学会による「論文の書き方講座」の在り方について、第17回造形芸術協議会で再度検討を行うことが確認された。

3. 各学会の現状と課題等の情報交換

（1）日本美術教育学会：代表理事 細谷，理事 大橋

日本美術教育学会は、教育をめぐる今日的状況を踏まえた組織づくりと運営の見直しに、定款の改訂を視野に入れて継続して取り組んでいる。概況は以下。①当事者意識をもった会員の育成と世代交代を果たすこと。特に現場教員の会員を増やすこと。②ホームページのリニューアルと有効活用。③日常的な研究活動の充実（オンライン美術教育連続セミナー、新たな事業の立ち上げ等、支部活動の活性化と相互交流の推進）。④今後の研究大会開催予定（2025年度：大阪大会（8月22日・23日）、2026年度：京都大会）。⑤学会誌の充実。⑥研究書籍の発刊。

（2）大学美術教育学会：理事長 新関，副理事長 芳賀，全国美術部門代表 新井

大学美術教育学会では、全国美術部門と大学美術教育学会の在り方が検討され、来年度から全国美術部門の会費を無料化し事業開始。継続的課題は以下。①総務局維持のための人材確保。②全国大会開催地区決定と負担軽減への対応（2025年度：千葉大会（9月13日・14日）、2026年度：北海道地区、2027年度：中国地区）等。③次世代の担い手の育成。

（3）美術科教育学会：代表理事 直江，副代表理事 大泉

美術科教育学会の概況は以下。①美術教育学叢書第4号、第5号を発刊。②東京大会（2026年3月14日・15日）では、国際的な企画の実施、全日本美術教育会議のシンポジウムを検討中である。③直近の岡山大会（2025年3月22日・23日）では、学会投稿論文ランチカフェを実施予定である。

また、3学会の学会役員の担当重複状況調査の結果報告があった。3学会の役員56名のうち、1つの学会の役員を担当する者が47名、2つの学会の役員を重複して担当する者が9名、3つの学会の役員が重複している者はいなかった。

4. 「論文の書き方講座」等について

本協議会の議題「2. 前回議事録確認」で再度検討が必要とされた、3学会による「論文の書き方講座」については、今後もしばらく造形芸術教育協議会にて意見交流を継続する必要性が再確認され、併せて次回協議会にて、それぞれの学会において、論文執筆や研究の進め方についてこれまで書かれてきた関連するテキストをできる範囲で持ち寄って交流を行うことが確認された。

5. 次年度の予定

幹事学会：日本美術教育学会 会議予定：2025年10月26日（日）・2026年3月8日（日）

以上

全米美術教育協会

大会、組織概況、ならびに会員調査について

直江俊雄 美術科教育学会



2024 NAEA ミネアポリス大会 4月4日-6日 全体会



Contents

Elmer Lifetime Achievement Award	Page 1
Manuel Barken Memorial Award	Page 1
Walter Ogle Civ. Leadership Award	Page 2
Committee on Multicultural Concerns (CMCC)	Page 2
J. Eugene Grigsby, Jr. Award	Page 2
Ellis Elmer Doctoral Research Award in Art Education	Page 2
Comstock Award	Page 2
National Art Educator Award	Page 3
National Division Art Educator Awards	Page 3
Regional Division Art Educator Awards	Page 3
State/Province Association/Internet Group Newsletter Award	Page 4
State/Province Association/Internet Group Website Award	Page 4
Presidential Chapter Award	Page 4
Max Arthur Goodwin Award for Distinguished Service Within the Profession	Page 4
Distinguished Service Outside the Profession Award	Page 4
NAEA, The Council for Exceptional Children (CEC)	Page 5
VSA Writer - Career Special Needs Art Educator of the Year Award	Page 5
NAEA, The Council for Exceptional Children (CEC)	Page 5
VSA Beverly Lewis Career Special Needs Lifetime Achievement Award	Page 5
New Professional Art Educator Award	Page 5
NAEA National Excellence Art Educator Award	Page 6
Preservice Chapter Sponsor Award of Excellence	Page 6
Outstanding National Art Honor Society Sponsor Award	Page 6
Outstanding National Junior Art Honor Society Sponsor Award	Page 6
Waring Stern Secondary Recognition Program	Page 6
The Gilbert A. Clark and End Zimmerman Leadership Advocacy Award	Page 7
Agent of Change in Equity, Diversity, and Inclusion Award	Page 7

会期中、多種多様な表彰が行われる。2024 NAEA ミネアポリス大会 4月4日-6日

NAEA ミネアポリス大会

2024年4月4日-6日 ミネアポリス コンベンションセンター

- 参加者 4,000名以上
- 約670のプレゼンテーションとワークショップ
- 展示業者 約60社

NAEAの概況

ミネアポリス大会 NAEA Executive Director Mario R. Rossero氏による報告より
2024年2月現在

- 会員 15,956名
- 全米50州、カナダのほとんどの県、48の外国など
- 7部門
初等教育、中等教育（Middle, Secondary）、高等教育、教職課程、
行政、美術館教育
- 22のinterest groups
- 1,764支部

NAEAの会員 部門別

ミネアポリス大会 NAEA Executive Director Mario R. Rossero氏による報告より
2024年2月現在 全15,956名中

- Elementary 25%
- Middle/ Junior 12%
- Secondary 34%
- Higher Education 6%
- Museum 3%
- Preservice 10%
- Supervision/ Administration 3%
- None-Specified 6%

NAEA会員調査より

ミネアポリス大会 NAEA Executive Director Mario R. Rossero氏による報告より
2023年10月実施 3,391名回答

43要因のうち、今後3年間の視覚芸術教育に影響を及ぼすと回答された上位3要因

- 材料費など資金の不足 23%
- 将来の教員労働力を制限する給与や福利厚生 22%
- 学校における芸術の軽視 21%

NAEA会員調査より

ミネアポリス大会 NAEA Executive Director Mario R. Rossero氏による報告より
2023年10月実施 3,391名回答

競合する美術教育諸団体の中でのNAEAの評価

11団体の中で比較すると下記のためにNAEAを利用すると回答した割合が多かった。

- 専門領域の研究やデータの提供 42%
- 芸術教育の振興 40%
- 専門職の擁護 38%
- 専門領域の認知度やリーダーシップ 26%
- 専門能力の開発 23%

教科教育学コンソーシアム報告

Report of the Japan Consortium of Subject Pedagogy Associations (JCoSPA)

前代表理事 直江俊雄（筑波大学） Former Representative Director : Toshio NAOE, University of Tsukuba

教科教育学コンソーシアムは、「教科教育に関連する学協会が、教育、学校教育ならびに教科教育に関して、国内外の研究機関・研究者及び実践者と交流を行うとともに、教科教育とその研究の発展を期することを目的として」（同ウェブサイトより）、2021年に発足した団体であり、美術科教育学会を含め14の学協会が参加している。

教科教育学コンソーシアムウェブサイト <https://jcospa.org>

本学会第12期理事会（2022-2024年度）からは、下記の理事が運営や共同研究に参加した。

教科教育学コンソーシアム理事：直江俊雄

教科教育学コンソーシアム研究推進委員：山本朝彦・竹内晋平

教科教育学コンソーシアムジャーナル編集委員：宇田秀士

科学研究費補助金 22H01012（代表：草原和博，基盤研究(B)「教科教育学のターミノロジーとメソドロロジーの体系化研究—学術共同体の構築のために—」研究協力者：池田吏志

2024年度の活動概要として、主に理事会議事録から、下記のとおり報告する。

2024年7月31日（日） 第1回理事会（オンライン）

審議事項（1）令和5年度活動・決算報告

- ・令和5年度活動状況について、下記の報告があった。
理事会
役員等改選
研究推進委員会
編集委員会
広報活動
加盟学協会の状況
- ・令和5年度収支報告および監査報告について、承認された。

審議事項（2）令和6年度活動計画・予算

- ・令和6年度活動計画について説明があり、承認された。
理事会：年度内に3回開催（第2回は11月頃，第3回は3月を目処）
研究推進委員会
編集委員会
広報活動：新たな取り組みとして、加盟学協会の全国大会等開催情報を共有・公開する
役員等改選：第3期に向けて改選準備・手続きを実施する
加盟学協会の増加
- ・令和6年度予算案について説明があり、了承された。

報告事項 各学協会の全国大会等の開催予定

- ・全国大会等開催予定のとりまとめ状況について説明があり、追加情報を加えてコンソーシアムHPにて公開することが確認された。

2024年11月27日（水） 第2回理事会（オンライン）

審議事項（1）令和6年度シンポジウムについて

- ・第5回教科教育学コンソーシアムシンポジウムについて、下記のように提案され、承認された。

日時：2025年3月9日（日）13:30～16:30（予定）

場所：東京都内にて対面開催（オンライン配信あり）（予定）

主題：教科教育学が直面する倫理的・実践的・政策的な論点争点を考える（仮）

審議事項（2）第3期理事等選出について

・下記の手順が提案され、承認された。なお、コンソーシアム理事の任期中に、所属学協会の会長・理事等の任期が満了した場合は、当該学協会の判断によりコンソーシアム理事の交代または任期満了までの継続を選択可能であることが確認された。また、代表理事及び会計監査の選出方法について意見交換がなされ、今後検討することが確認された。

第3期理事等選出手順：2025年3月20日頃までを目処に、登録フォームにて報告する。

報告事項（1）委員会活動状況

編集委員会：『教科教育学コンソーシアムジャーナル』第3号の査読状況などが報告された。

研究推進委員会：科研・基盤（B）への新規申請や海外調査の予定などが報告された。

2025年3月14日（金） 第3回理事会（オンライン）（AIによる暫定議事要旨より）

第3回理事会では、令和6年度の活動報告と令和7年度の活動計画について議論が行われ、コンソーシアムの活動や第5回シンポジウムの成功が報告された。

会議では、理事会や研究推進委員会の活動、シンポジウムの開催、論文審査、広報活動などの報告が行われ、収支状況も確認された。

さらに、新体制への移行、オンラインジャーナルのアクセス数向上、教科教育学に関するハンドブックの出版、今後のプロジェクトや予算措置についても議論が行われた。

次のステップ

各学協会：3月末までに次期理事の登録を行う。

研究推進：教科教育学研究ハンドブックの出版に向けて、タイトルの再検討を行う。
：出版社との交渉を進め、出版費用や印税に関する具体的な条件を確認する。
：出版物の執筆者や内容について、各学協会の同意を得る方法を検討する。
：出版物のオンライン公開や一般読者へのアクセス方法について検討する。

編集委員会：コンソーシアムジャーナルのアクセス数を確認し、理事会に報告する。

事務局：次年度の理事登録フォームをメーリングリストで案内する。
：出版費用の支援額について、最終的な金額を理事会で再確認する。

2025年3月9日（日）13:30～16:30 教科教育学コンソーシアム 第5回シンポジウム開催

テーマ：教科教育学研究の新・論点争点—学域の越境がもたらす倫理的、政策的、社会的課題を考える—

場所：キャンパスプラザ京都 第3講義室、オンライン配信あり

基調講演

（1）趣旨説明

（2）報告

- ・学校の現場との交渉—研究倫理に関する新・論点争点— 中村大輝（宮崎大学）
- ・政治の世界との交渉—制度設計に関する新・論点争点— 川口広美（広島大学）
- ・教師・市民との交渉—社会的受容に関する新・論点争点— 渡部竜也（東京学芸大学） 星 瑞希（北海道教育大学）

総合討論・協議 草原和博（研究推進委員会委員長）

美術教育史研究部会

金子 一夫（茨城大学） 有田 洋子（島根大学）

1 令和6年度美術教育史研究部会のテーマ「教職大学院時代における美術教育学の危機」

本学会は前身の大学美術教科教育研究会第1回から数えて47年、あと3年で創立50年となる。「学会50年史」を構想したとき、最終章の内容が、教科教育専攻大学院が教職大学院へ転換して美術教育学を支える制度が弱体化してしまい、学会は美術教育学を自立させられるかという懸念の記述になりかねない。それではやりきれない。その危機意識が美術教育史研究部会の令和2年度以来何度も戦後美術教育学史をテーマにさせている¹⁾。そして令和6年度岡山大会でも上記見出しにあるテーマとなった。この岡山大会での有田・金子らによるワークショップ「面白くて高度な美術教育学研究は誰にも開かれている」、金子個人発表「美術教育学研究における内的倫理」も美術教育学の危機的現在と再生の未来を見据えている。

2 基調提案

現在は教科教育専攻大学院が教職大学院へ転換して（平20頃～）、美術教育学の制度的支えが弱体化し、美術教育学は制度からの自立を求められている状況である。美術科教育学会も懸念される状況にある。学会誌論文掲載編数と掲載率の変化を見ると、近年の掲載編数の減少傾向のグラフは、教科教育専攻大学院数の落ち込みと相似形となる。そして学会会員数・大会参加者数と大会口頭発表者数・学会誌論文掲載数もグラフ化して比較すると、会員数は増加傾向にあるのに、口頭発表数・学会誌掲載論文数は大きな変化はずっとない。つまり特定の人（しかも多くは現在60・70代になっている会員）の論文が何度も掲載されていることは、若手の新たな口頭発表・論文投稿数が極端に少ないことを示している。

これは理念に向かって努力する時代から現実逃避する時代になったといえればそれまでである。しかし学会として何らかの対応をしたい。例えば、個々に対応するだけではなく、大学院や学会員が派閥をつくることなく共働して研究者養成機能を果たす。学生会員制度で出現した学生会員に研究・参加・投稿意欲を喚起する。就職や昇進といった実利的側面を否定することはないが、純粋贈与としての研究の面白さを伝えるようにしたい。「面白くて高度な美術教育学研究は誰にも開かれている」のである。また若手が孤立しないことも重要で、相互交換の場、例えば懇親会の意義も再確認したい。自分さえよければ、学会員が減っても学会誌が薄くなってもよいと考えるべきではない。学会は純粋贈与の場である。

3 協議話題と参加者

- ・教科教育はもちろん実技も含めてどの分野も、ポストも現員も維持するのは大変な状況にある。例えば、学部の美術教員のポストを減じて教職大学院にまわす、現員の専門分野を移動して空席ポストを作る、ポストの貸し借りや便宜的移動をして、なんとかやりくりしている。
- ・研究者教員が教職大学院へ突然配置換えされる事例があった。
- ・教科教育2名体制を維持している大学はほぼない。教科教育6名体制だった大学も、皆ほぼ半減かそれ以下。
- ・文部科学省・国からの教育・研究への介入も年々強くなる。SDGs, STEAM等。
- ・そもそも大学入学前の高校生に美術を好きになってほしい。そして学部生に活気づいてほしい。

その他、公表しにくい具体的で興味深いエピソードも多数紹介された。ただ、今部会のテーマである学会の行く末についての意見や話題が少なかったのが残念である。それだけ現在自分の所属している組織が大変な状況にあるということで、学会についてまで考えている余裕がないということであろう。

参加者19名。今回は学会草創期会員から教職大学院修了生まで、多様な年代の方に参加いただいたことが特徴的でした。長谷川哲哉（和歌山名誉教授）、増田金吾（東京学芸大名誉教授）、赤木里香子（岡山大）、宇田秀士（奈良教育大）、直江俊雄（筑波大）、佐藤賢司（大阪教育大）、加藤可奈衛（大阪教育大）、牧野由理（埼玉県立大）、神谷睦代（新潟県立大）、斉藤暁子、亀澤朋恵（高田短大）、藤原智也（愛知県立大）、友竹晋太郎（広島市立長束中）、菊池虹（立教大）、清家颯（東京学芸大）、森脇咲子（岡山修士院）、福田真子（東京学芸大教職院）、金子と有田。参加者全員に感謝申し上げます。

1) 令和2年度愛媛大会「美術教育学研究の先達に聞く―美術教育学の初期研究者はどのようにその道に入り、切り拓いてきたのか―」。

令和5年度弘前大会「戦後日本の美術教育関係学会の歴史的検討―制度的支えを失った美術教育学は自立可能か―」。

乳・幼児造形研究部会

Early Childhood Art Education Study Group

塩見知利（平安女学院大学） 丁子かおる（和歌山大学） 宮野周（文教大学）

1. はじめに

昨年度に引き続き、令和6（2024）年度の乳・幼児造形研究部会は、乳児クラス（0～2歳）の造形に関する理解と協議を中心にして、1月にリモート開催（詳細は3月学会部会概要に掲載及び3月部会にて報告）、3月は第47回美術科教育学会岡山大会にて対面で日頃より協議を行っている部員間同士で互いの研究について交流を図るため、研究発表を行った。また、今後の部会で取り上げるべきテーマや課題についても合わせて協議を行った。

2. 令和6（2024）年度部会報告

1月の部会（参加人数：発表者、事務局等も含めて15名）は、リモートにて開催し、15名の参加者があった。最初に乳児の造形に関わる保育の動向説明と、継続的に取り上げていくことの説明があり、慈絃保育園2歳児クラス（園長：松山益代、クラス担任：伊藤大貴）の実践研究『子どもの遊び・生活・表現～ひとりひとりの育ち～』の発表と検討を行った。2歳児クラスでは「時間を区切らずに活動を保障し」、子どもの遊びの姿と育ちに合わせて保育室の空間の拡充や、ダンボールを使って区切った場の設定、取り出しやすい素材コーナーの配置などを工夫して「一人一人の興味・関心に着目し遊びの場を保障」する取り組みを行った。また、食事と遊び場面について、手づかみ食や食べこぼしを手や指でなぞる姿と素材の量の把握と感触、性質を知る、試すなど、砂や土、粘土、絵の具といった感触遊びとの関連が紹介された。また、園庭で粘土質の泥遊び場「カルデラ」や砂場の遊びでスコップやスプーンなど道具を使う遊びは、食具を上持ちする手掌回内握りから、手指回内握りへ、指を使って3点で持つように手指の発達に影響するなど、遊びから生活動作を獲得するため、遊びと一体となった生活や連続性を大切にしているという。また、子どもの興味や発達に合わせて保育室の環境を変化させることで、室内でも段ボールや空き箱、画用紙、広告紙やペン、クレヨンといった用具や素材を自由に使える素材コーナーを設置して工夫し、様々な経験の遊びで発達を促し感覚からイメージをもち、つくっていく、シール貼りの事例などで、友達を受け入れ、友達に働きかける育ちが子どもの姿から紹介された。

乳児クラスは、生活が基本であり、乳・幼児は感覚を駆使して育ち、生活の中で自分が持っている機能をすべて使いたがる。子どもは試して、感じて、考えて、モノ、音、ことば、身振りで表現する。保育者との応答的関係の中で、描くだけの造形ではなく、生きること自体が造形と捉えることの提案があった。乳児期から触れる、感じるものの感覚の探究にはじまる遊びの過程を大切に、子どもを育てていく重要性が分かる実践研究であった。参加者からは、みとりが丁寧なされた実践、保護者にも伝えたい等の感想があった。

3月の部会（参加人数：発表者、事務局等も含めて12名）では、部員による研究発表（2件）を行った。一つ目は、海沼恭史（早稲田大学大学院）が「幼児の造形表現活動における主体性の考察——実践事例からの検討——」をテーマに発表した。海沼によれば、子どもの「主体性」は、子ども個人で発揮するのみならず、より広くとらえる必要があるとし、川田学の理論（主体性＝関係論）や林健造の造形表現過程の三系論等を基に、研究結果として、3歳児の実践事例から「中動態」の様相としての幼児の「主体性」が発揮されていることを明らかにした。宮野周（文教大学）の発表では、保育者養成校における子どもの造形表現を学ぶ授業での実践事例を紹介しながら授業の考え方や取り組みの要点を発表した。社会的構成主義、状況的学習論などを基に、「まなびほぐし」を大切に教員から「教わる」という学びを解体する授業（例えば、水を付けた筆で描き心地のいい場所を探す「水でかく」、のこぎりで生木に挑む等）や、学生が学びをまとめ振り返る「ポートフォリオ」、学生自身が主体となって他大学と共同で行っている「子ども元気プロジェクト」の取り組みも紹介された。研究発表後は、参加者からの質疑応答や協議を行い、今後も部員間の研究発表については継続していくことが確認された。

3. 次回の部会について

岡山大会に引き続き、2025年度第1回乳・幼児造形研究部会では、日頃より協議を行っている部員間で互いの研究について交流を図る研究発表を予定している。また、継続する乳児の造形についての保育やその研究の検討、今後の部会で取り上げるべきテーマや課題についても協議を行う予定である。

- ・開催日時：2025年12月13日（土）10時30分～12時00分 リモート開催を予定
- 各部員からのご意見や実践の紹介などありましたらお知らせください。

授業研究部会

Lesson Study Group

畑山 未央（事務局・植草学園大学）

1. 2024 年度の研究テーマと経緯

2024 年度の研究テーマは、「美術科教育における『教科固有のもの』と授業研究」である。本研究テーマの出發は 2023 年の研究活動に遡る。授業研究部会では、新たなテーマで研究活動を始動するにあたり、2023 年度の初めにまずは過去 2 年間の取り組みを総括しながら、研究としてさらに深めたいものや、これまで研究対象にできていなかったことを洗い出す観点で意見やアイデアを出し合い、「授業研究のリサーチ・クエスチョン」を導き出した。結果、導き出されたものは「研究の必然性」、「授業研究における言語／非言語」、「研究の視点」、「実践研究／実践報告」など多様な視点で複数に渡った。この結果を受け、「美術科教育における『教科固有のもの』と授業研究」を研究テーマとし、今後数年かけて追究していくこととした。

この決定の背景には、「我が国の教育課程において、他教科との共通点や差異の関係性からも教科としての固有の意義をどう考えるかを一層重要視する」という当部会の姿勢がある。また、「教科固有のものを考えるにあたっては、自ずと他の教科などとの共通点や差異を考える必要性」も立ち上がってくる。一方、美術科教育における従来の授業研究においては、その多くが研究者各自のテーマや課題にとどまっており、「これからの時代を俯瞰的に見据えた教科の意義や独自性を広く伝えていくという点ではまだ課題がある」と考えられる。

2. 2024 年度の授業研究部会の活動報告

2024 年度は、各学校種で図画工作・美術科の実践に取り組んでいる方々へ実践及び研究ベースで考えている「美術科教育における教科固有のもの」についてアンケート調査を実施し、本研究テーマに対する考察をしていくこととした。また、事前検討や回答の分析などのため、コアメンバー間のオンラインミーティングを 8 回行った。

当部会では、「実践者は美術（図画工作）に固有のものがあることを感じながら実践を積み重ねている」と考えている。そこで、アンケート調査は、乳幼児、児童、生徒、学生（等）を対象とした「回答者自身の授業・保育」や「教員・保育士養成に関する回答者自身の研究」において、「実践を積み重ねている中で感じている美術（図画工作）に固有のもの」を問い、そこから図画工作・美術科という教科の価値を見出していくことを目的とした。アンケートを依頼したのは、これまで当部会の参加者を中心に、乳幼児、児童、生徒、学生（等）に対して造形表現・美術科教育を実践している 168 名である。アンケートの回答期間は 17 日間設け、56 名から回答を得た。以上を経て、コアメンバーが、テキストマイニングの頻出語より、文脈を抜きにしたオープンコーディングの手法を用いたアンケートの分析を行った。例えば、名詞を「感性的／経験的／社会情動性スキル」で分ける、サ変動詞を「活動の質（創造的思考／理解判断／場面）」で分ける、動詞を「メンタル／フィジカル」に分ける等を試し、美術科固有の見方を抽出した。

3. 岡山大会における授業研究部会の開催報告と 2025 年度の展望

上記を踏まえ、岡山大会では、アンケートの回答と「幼児、児童、生徒の育てたい力」、「教師の関わり方」の観点から分析結果を開陳し、参加者の方々と「アンケート結果に関する所感」や「参加者自身が考える教科固有のもの」に関するディスカッションを展開した。また、そのディスカッションの内容は生成 AI を使って図式化することを試み、その結果を参加者へ共有した。

【開催日時／開催方法／参加者数】2025 年 3 月 23 日（日）15:55～17:25／対面開催／14 名

ディスカッションでは、次のような示唆に富むご意見を多数いただいた。「それぞれの立場（校種）が大切に行っていることによって、見えてくるものが異なる」、「学習指導要領をはじめとしたスタンダードに従順な回答が多い」、「子どもが自己決定していくプロセスに教科の固有性がある」、「教師はできていないところを探しがちだが、楽しいだけでなく苦しみを乗り越えた後に感じる成果を実感することも大切」、「芸術教科同士でも、比較すると見えてくるものが異なるかもしれない」。さらに、参加者の事後アンケートでは主に下記の回答をいただいた。「教科固有のものを考えていく過程で、美術とはなぜ必要なのか、などという問いに辿り着いた」、「美術に関心のある教員とそうでない教員とでは、回答に差があるのではないかな。後者の教員のデータも取ることができたら、実態を捉えた課題を見出せるのでは」、「教科の根幹に近い内容であるにも関わらず、回答者によってこんなにも認識にズレがあることに気付かされた」、「授業をシンプルに考える方向も目指してほしい」。

次年度は、岡山大会での成果と反省を踏まえ、「発達間や教科間の比較」や「これからの美術科教育」などを可能性に見据え、90 分枠での有意義な開催のための情報量やあり方の改善も念頭に置きながら継続研究を進める。

造形カリキュラム研究部会

Art Curriculum Study Group

宣昌大（大阪教育大学附属天王寺中学校）、妹尾佑介（岡山県立玉島高等学校）

2024 年度の造形カリキュラム部会では、造形カリキュラム作成において生徒に育むべき「社会と出会い成長し続ける資質・能力」の想定、検討を行う為に、理想とする「社会と出会い学び続ける大人」の姿について議論を行った。参加者の専門分野は多岐にわたり、幼児教育から高等学校教育、社会人教育まで幅広い発達段階の対象者に教育活動を行っている研究者が集まった。そこで、専門分野などが重複しないように配慮して3つのグループになり、ディスカッションを行った。

まず、各自が理想とする学び続ける大人の状態を想定し、その姿を共有することにした。参加者は思い思いに理想とする姿について発言をしていたが、おおむね発言は次の3点に集約できる。

- ①「ワクワク」、「遊び」など学びに対する期待感を持ち続ける姿。
- ②「失敗を恐れない」など自分にとって新たなことに挑戦し続ける姿。
- ③「疑問」や「問い」など、その人にとって「当たり前」の状況に対して、新たな視座や視点で問い直し、変わり続けようとする姿。

次に、これらの意見について、更に個人的な経験などを省察し、対話的にグループ内でイメージを共有した。

①に関しては、「面白そうだから取り組んでいたことが、後から振り返ると学びになっていた」や「目的を決めすぎると新しいことにならないことが多い」などの意見が複数のグループから出た。これらの意見を総合すれば、合理的な思考や判断に頼りすぎずに、自身の身体感覚や直感などに基づいて行動することで、自分の外界に対する認識が変化していく過程が、新たな学びの手掛かりになると考えられる。

②に関しては、「面白いと分かっていることをしていても学びにはならない」など、自分にとっての予測困難さが学びの重要な要件になっていることが対話から導き出されたグループがあった。ただし、「失敗を恐れない」ことが「失敗をしてもよい」という気持ちに変わってしまった場合も、自分にとっての新しい物事を学ぶ契機になりにくいのではないかという意見も出た。失敗をしないように今ある自分自身の能力を発揮した上で生じてしまった失敗について、省察することが学びの根幹にあるという議論が生じていた。

③に関しては、「意図的に日常のルーティンを変えてみる」や「現状に満足すると学べなくなる」などの意見が出ていた。これらの意見の多くは、自分の外界に対する興味や共感の幅が広がっていくことの重要性について語られていると解釈できる対話であった。これは、部会の冒頭の趣旨説明の中で、佐伯胖の「学びのドーナツ論」などの考えや、清田哲男の「創造性が社会と出会う美術教育」の学びの過程についての理論についての説明があったことの影響が考えられる。これらは、成人に限らず、学びの根本的な構造について述べている理論であるが、グループディスカッションを通して、教育理論が個々の経験に結び付いていく「語り」の過程を見取ることができたと考える。

そして、ジグソー法を用いて、他のグループで展開された対話や議論について知り、さらに自分自身の学びについての省察を行った。ジグソー法を活用し、他グループの対話内容を共有することで、参加者が異なる視点から学びを深める機会を提供することができた。各参加者は、自身のグループで得た洞察を他グループに伝える役割を果たしつつ、全体の議論を俯瞰的に捉えることができたであろう。これらの議論を通じて、参加者は自身の経験を振り返り、新たな教育目標の構築に向けた具体的な示唆を得ることができたと考えられる。

多くの内容が美術教育の文脈に限定されず、個々の趣味の話や失敗談など、一見するとざっくりばらんな内容に見えるものばかりであった。しかし、こうしたリラックスした雰囲気の中で語られたことの中に、個々の省察があったと考える。2024 年度の岡山大会のテーマは「Art の縁辺から学びを考える」であったが、まさに art の縁辺にある何気ない日常の経験から、美術教育への新たな問いの手掛かりを得られた部会となったと考える。

一方で、これらの共通認識を基に、子どもたちの学びを問い直すまでには至らなかった。次回以降、改めて美術教育の文脈に立ち返り、新たな価値を創造し続けようとする資質・能力の育成について議論をしていきたいと考える。

インクルーシブ美術教育研究部会 Inclusive Art Education Study Group

手塚千尋（明治学院大学）・池田史志（広島大学）

本部会は、インクルーシブ美術教育の在り方や可能性を実践と理論の両側面から検討することを目的としている。2024 年度は、第 47 回美術科教育学会岡山大会 2 日目（2025 年 3 月 23 日 15:55～17:25）に研究部会を開催した。今回の部会では、岡山県を拠点に障害のある人や地域住民と共に創造活動を展開する福祉事業所「ぬかつくるとこ」の代表である中野厚志氏と、アートディレクターの丹正和臣氏をお迎えし、「ぬかの日常は『なんでそんなん』』と題して講演及びワークショップを対面とオンラインのハイブリッドで行った。参加者は、対面 24 名、オンライン 9 名だった。以下、当日の研究部会について報告する。

1. 趣旨

ぬかつくるとこ（<https://nuca.jp/>）は、障害のある人や地域住民とともに、誰もが創造に参加できる環境を提供する福祉施設である。日常生活とアートを融合させ、いわゆる形式的な「作品」とは異なる新たな視点や価値を生み出している。絶妙なワードセンスで選ばれたキーワードやことば遊びが源泉となって展開される即興的でパフォーマンスな企画は、「おもしろい」や「たのしい」が溢れた誰もが参加できる創造的な活動である。例えば、「なんでそんなんエキスポ」、「そのうち国際芸術祭」では、人の「くせ」や「こだわり」に価値を見出し、ユーモアを以て肯定的に捉えるプロセスそのものをプロジェクト化している。排除されがちな他者の「異質性」を「なんでそんなん」と笑い飛ばすユーモアや即興性のある創造的な営みが、分断や断絶を乗り越えたインクルージョンな社会づくりのヒントになるのではないかと。同様に、教育現場において新たなプロジェクトや授業を構想・実践する際の示唆を得られる機会になることを期待し、本企画に至った。

2. 講演・ワークショップの概要

はじめに、中野氏より「ぬか」設立の経緯や、実践についてお話いただいた。「ぬか」の原点である、「ぬかびと」（＝利用者）の「くせ」や「こだわり」をコンセプトに、パフォーマンスやワークショップなどイベント化していった事例が複数紹介された。例えば、施設への訪問者を巻き込んで即興で劇が展開されたり、その年の干支になりきる「干支 1 グランプリ」に訪問者が審査員として加わったりするほか、名もなき小さな行事が日常的に行われているという。実践に参加するぬかびとさん自身も楽しそうだが、それ以上に「ぬか」のスタッフたちには日常をいかに楽しむかを追求する姿勢があるという。ぬかびとであるショウヤさんの「積む」というこだわりから生まれた「ツミマショウヤ（ひたすら積むワークショップ）」は、ワークショップ会場を工事現場に見立て、一輪車や足場が組まれたセット上にひたすら箱などを積み上げ、写真を撮る活動としてデザインされている。当事者であるショウヤさんは現場監督としてそこでも積む行為に没頭する。ぬかびとさんたちがどうしてもやってしまうことから創られたワークショップは、ぬかびとさんと社会を繋ぐ「個別のオリジナルメディア」として機能しているという。部会後半では、「なんでそんなん」のミニワークショップに取り組んだ。本企画では、他者の突飛とも思える行動をネガティブに捉えるのではなく、ユーモアを以てポジティブに「ツッコミ」を入れることでおおらかにそれらを受け入れ、楽しむことをねらいとしている。参加者はワークシートを記入し、グループで共有した後、一推しを全体に向けて紹介した。一緒に暮らす家族や、自分自身の「なんでそんなん」を披露し合い、



みんなで笑い飛ばす時間を過ごした参加者からは、「なんでそんなんを介して場が和らぐ・交流できる体験ができた」や、「肩の力を抜くことが出来ました」、「自分の想定を超える行動をとる他者を「厄介」とラベリングするのではなく、なぜそうしたんだろう、と捉え直すことの重要性を感じました。」などの感想が寄せられた。

3. まとめ

ユーモアというマインドセットが作りだすポジティブな感情や、創造的な気づきが、他者との共感を生み出す呼び水となることを実感する機会となった。

リサーチフォーラム in 鳥取 Research Forum in Tottori

第2回 朝鑑賞シンポジウム@鳥取県立美術館

青木善治（滋賀大学）

1. 趣旨説明

本フォーラムは、全国各地の朝鑑賞における様々な取り組みを紹介いただきながら、朝鑑賞実践を考え、朝鑑賞の普及についても道筋を探り、学校教育において美術鑑賞の可能性と今後の展開を参加者と共に考えて行く目的で実施した。朝鑑賞は、朝の始業前の10分間、朝読書に代わり絵画作品の鑑賞活動を行う取り組みで2016年に埼玉県所沢市立三ヶ島中学校で始まった活動である。この活動は授業ではなく、目標や評価も不要であり、作品を学級で見て感じたことを対話を通して、児童・生徒の思考を促す活動である。朝鑑賞についてはこれまで学力向上や自己肯定感（坂戸市立桜中学校、2019）、メタ認知の向上（奥村、2019）など数値化されており、また、相互行為分析による質的研究（青木、2022）によって、その成果が確認されている。実践現場からは「緘黙の児童が手を上げた」、「不登校の子がその日だけ登校する」などのエピソードも届いている。2023年長野県の東御市では、市の文化スポーツ振興課が朝鑑賞の取り組みを教育委員会と連携して市内全小中学校で昨年度から朝鑑賞に取り組みは始めている。

シンポジウムでは三澤一実教授によるコーディネーターのもと午前の部は6名の実践発表と質疑、午後の部は5名のパネリストから様々な取組を紹介していただきながら、クロストークを行い、朝鑑賞の更なる可能性と課題を明らかにする。そして、参加者の皆様からの声もお聞きしながら、朝鑑賞についての理解を深めるとともに、ご所属での実践へとつなげる機会とすることを目的とした。



2. フォーラムの概要

開催日時：2025年2月23日(日)10:00~16:30

会場：鳥取県立美術館ホール

テーマ：第2回朝鑑賞シンポジウム2024「朝鑑賞で安心安全な学校づくり——朝鑑賞の実践について道筋を考える——」

コーディネーター：三澤一実氏（武蔵野美術大学 教授）

パネリスト：海老塚 耕一氏（多摩美術大学 名誉教授 日本美術家連盟 理事）

青木 善治氏（滋賀大学教職大学院 教授 学校教育学博士）

沼田 芳行氏（埼玉県所沢市立安松中学校 教諭 元埼玉県公立中学校校長）

星野 優子氏（茨城県教育研修センター 指導主事）

嘉戸 浩二氏（鳥取県教育委員会事務局 中部教育局 学校教育担当 係長）

実践発表者：宮河 俊宏氏（埼玉県 上尾市立原市南小学校 教諭）

鑑 謙治氏（鹿児島県 奄美市立崎原中学校小学校 校長）

阿部 郁美氏（新潟県 長岡市立上組小学校 教諭）※オンライン発表

中山 歩み氏（鳥取県 倉吉市立鴨川中学校 校長）

篠原 英里氏（青森県 八戸市美術館 主査兼学芸員）※オンライン発表

高橋 則幸氏（長野県 東御市企画振興部文化・スポーツ振興課長）

参加者：200名（現地40名、オンライン160名）

主催：鳥取県立美術館／共催：鳥取県教育委員会、美術科教育学会、全国大学造形美術教育教員養成協議会

3. プログラム・日程

開会式：10:00-10:10

実践発表：10:10-12:15

パネルディスカッション 質疑応答・閉会：13:30-16:30

4. フォーラムの実際

午前の部では、学校、美術館、行政の様々な立場の6名の皆様から以下のような先進的な事例による成果や課題が発表された。

①宮河俊宏教諭は学級担任による取り組みから、児童がファシリテーターとなった朝鑑賞、朝鑑賞による異学年交流など、これまでの実践を通じた児童や職員の変容と今後の可能性について発表した。②鑑謙治校長は、調査より児童生徒の自己肯定感の低さが分かり、朝鑑賞実施を通じて、学力向上や児童生徒の自己肯定感の高まりがみられたことを発表した。③阿部郁美教諭は、小学3年生で4か月間行った実践について紹介し、互いの見方・考え方を受け入れながら、自分の考えと比べたり関連付けたりし、作品の見方について生き生きと語り合う子供たちの姿について発表した。④中山歩み校長は、昨年、毎週金曜日の「朝鑑賞」をスタートされ、多忙化解消に努めなければならない学校の職員へのアプローチを発表した。また、学力向上のためには、学級力向上も並行して行っていくべきだと考え、本校生徒の課題である表現力の向上も含めた「朝鑑賞」への取り組みの経過を発表した。⑤篠原英里主査兼学芸員は、学校教育との連携強化の一環として、市内小中学校を対象に朝鑑賞の研修を行い、講師を招いての研修会に加えて、希望校には美術館スタッフが出向き、校内研修を行うなどの事例を発表した。⑥高橋則幸東御市企画振興部文化・スポーツ振興課長は、長野県東御市は令和5年より市内すべての小・中学校で朝鑑賞の取り組みをスタートさせ、実践事例を実際の記録映像や写真を交えて紹介し、取り組みを始めて2年目の進捗状況を発表した。

続いて午後の部では、コーディネーター三澤一実教授のもと、5名のパネリストから自己紹介の後に様々な実践と参加者からの質問による、クロストークが行われた。

①美術家としての制作を、鑑賞理論としても論理化しつつ、子どもとの交感（あそびじゅつ）を通して独自に展開される海老塚耕一武蔵野美術大学教授からは、美術家として感じている朝鑑賞に対する提言が多数示された。②新潟県立近代美術館に勤務した際に対話型鑑賞の魅力を体感し、その後校長として朝鑑賞を実施した青木善治は、その効果などを「教師が『教えない人』になれる時間」に表し、子どものみならず保護者の変容も含めた事例を説明した。③2016年より学校研究にアートを取り入れたプロジェクトを主宰し、全国で初めて朝鑑賞を導入・実施した元埼玉県公立中学校校長の沼田芳行先生は、中核となる教育活動に「朝鑑賞」を据え、子どもたちのこれからに生きる学びのチカラを育んできた事例について、自らの経験をもとに説明した。④茨城県公立中学校で美術科教員としての勤務後、茨城県教育研修センターで図画工作・美術科担当を務める星野優子指導主事は、STEAM教育におけるアートに迫るための一つの方法として朝鑑賞を研修に取り入れ、県内での朝鑑賞普及につなげている事例を説明した。⑤鳥取県教育委員会事務局中部教育局で学校教育担当係長を務める嘉戸浩二係長は、鳥取県中部地区で、所管の市町教育委員会、各学校とともに、教育現場での美術館の活用、美術や図工を通じた子どもたちの資質・能力の育成に携わり、その成果を説明した。

以上、朝鑑賞による安心・安全な学校づくりに関連した話題も展開され、三澤一実教授の的確なコーディネートのもと、理論と実践の多様な視点から朝鑑賞の意義を深め、今後の課題を含めて学び合う貴重なシンポジウムとなった。

5. 参加者からの感想（アンケート自由記述より抜粋）

- ・ご登壇の方々やパネリストの方々と直接お話しできて嬉しかったです。皆様からのたくさんの示唆をいただきながら、鳥取の朝鑑賞が広がっていくよう進めていきたいです。
- ・今日は、素晴らしいシンポジウムをどうもありがとうございました。この取り組みが様々な形で全国へ広がっていて、大変頼もしく感じています。海老塚先生の、考えることと感想を言うことの違い、時間をかけて考えることの大切さという所が大変胸に響きました。
- ・今日のシンポジウムはZOOMからも大変見やすかったです。関係者の皆様全員に、心からお礼を申し上げます。
- ・開会の挨拶の際に、足羽英樹鳥取県教育長から「朝鑑賞」を鳥取県内全域で推進されていかれるとのお話を伺って、「朝鑑賞」に寄せる期待の強さとその可能性をひしひしと感じました。

リサーチフォーラム案内 in 東京・成城

Notice of the Research Forum in Tokyo・Seijo

授業から見つめ直す“造形遊び”の現在地

栗津謙吾（成城学園初等学校）

昭和 52 年の小学校学習指導要領「図画工作」の改訂において、「造形的な遊び」が初めて登場して以来、造形遊びはどのように教育現場に根付き、どのように変化し、現在に至っているのかについて、本フォーラムでは授業という具体的な実践を通して改めて考察いたします。

導入から 49 年目を迎える今、当初の理念や導入の経緯を振り返るとともに、これからの造形遊びの在り方を多面的に再考することを、本フォーラムの目的としています。公開される授業は、「造形遊び」という教育実践を通して、当初の理念と現代の授業との接続を探る試みです。授業者は、単なる活動紹介にとどまらず、造形遊びが子どもの造形的思考や他者との関係性、そして世界の見方にどのような影響をもたらすのか、という問いを背景に授業を設計・実施いたします。そこには、教材構成や環境設定、教師の関わり方といった要素における具体的な提案が込められており、造形遊びの教育的意義を再検討する出発点となります。

単なる実践紹介にとどまらず、教材構成・環境設定・教師の関わり・子どもの表現といった観点から、教育実践の背景にある思想や概念を多層的に読み解きます。授業者・研究者・参加者がともに考え、対話を通じて「これからの造形遊び」の可能性を探る場となることを目指します。多くの参加者の方とともに、これからの造形遊びを考える機会としたいと考えます。

1. 日程・タイムスケジュール

2025 年 7 月 19 日(土) 12:30~17:15

12:30 - 13:30 授業 (1)
14:00 - 15:00 授業 (2)
15:15 - 15:45 造形遊びの歴史から
15:45 - 16:15 これからの造形遊びの在り方
16:15 - 17:15 対話とディスカッション

2. 授業者・パネリスト

【授業者】 河村 泰正（練馬区立豊玉第二小学校）
斉藤 洋介（横浜国立大学教育学部附属鎌倉小学校）
【パネリスト】 村田 透（滋賀大学）
山野井 誠（調布市立北ノ台小学校）

3. 開催方法

対面開催を基本としますが、zoom ミーティングを用いたライブ配信を行います。
対話とディスカッションパートでは、zoom 参加者もディスカッションにご参加いただけます。

4. 会場

成城学園初等学校 東京都世田谷区祖師谷 3 - 52 - 38 （最寄り駅：小田急線「成城学園前駅」）
zoom 参加用の URL は、お申し込み完了後に Peatix より送付される通知メールにてお知らせいたします。

5. 参加費：無料

6. 申し込み方法：参加ご希望の方は以下の Peatix イベントページ URL または QR コードよりお申し込みください。

Peatix のイベントページ URL : <https://forum2025.peatix.com/>

7. 問い合わせ先：成城学園初等学校 栗津 謙吾 awumemio@gmail.com

8. その他：本会は学会員以外の方にもご参加いただけます。

お申し込み時にご確認事項への同意をいただいた方のみ、ご参加いただけます。



リサーチフォーラム案内 in 大阪

Notice of the Research Forum in Osaka

戦後美術教育の歴史的検討—戦後美術教育は何であったのか

有田洋子（島根大学准教授） 金子一夫（茨城大学名誉教授）

日時 2025年7月12日（土）13:00～16:00（終了後に懇親会を予定）

会場・後援 サクラアートミュージアム・サクラクレバス

540-8508 大阪市中央区森ノ宮中央1-6-20 最寄駅 JR線 or 地下鉄中央線「森ノ宮」

概要は金子の個人HP（美術教育史研究所：<https://kazuo-kaneko.net/>）に掲載。

参加費無料 定員50名 会場参加者は上記HP記載のメールアドレスに **7/7**までに申し込んでください。

オンラインはライブ配信のみ予定（録音・録画不可）。Peatixで事前申込。参加時は顔・氏名・所属を要表示。

会場参加者のみの協議の時間と配付贈呈資料も用意しています。

1. 趣旨 未来は過去と現在を基礎としないと描けない。戦後80年たった、そして美術科教育学会は創立50周年を目前に控えている。今後の美術教育を考えるため戦後美術教育史の個別研究成果を発表し参加者と検討する。今回は、美術教育学史、美術教育運動史、地方美術教育史、美術教育材料史の個別的研究成果を用意する。

今回の会合と連動して、12/20に代表：永守基樹、コーディネーター：北野諒・清家颯による「2025年度リサーチフォーラム in 大阪—21世紀における造形遊びの再布置化へ向けて」を同会場で開催予定である。

2. 発表者と発表題目 その他

金子一夫 基調提案 戦後美術教育史研究の諸視点

有田洋子 戦後美術教育学の制度基盤の形成過程

[美術教育学史]

新井哲夫 戦後の美術教育運動 創造美育協会を中心に

[美術教育運動史]

長瀬達也 戦後地方美術教育団体の結成 秋田県における諸相

[地方美術教育史]

金子一夫 材料史の美術教育史 戦後初期の不透明水彩への転換

[美術教育材料史]

サクラアートミュージアム学芸員清水靖子氏 コメント。菊地虹 技術支援など

3. 基調提案

戦後美術教育史上の個別的問題の研究は、少ないながらもあつた。ただ戦後美術教育全体を見通す通史的研究はほとんどない。そこで戦後美術教育史全体を考える上の①枠組みと②諸問題を本リサーチフォーラムで検討したい。まず①として戦後美術教育史をいわゆる戦後の前提の呪縛を脱して冷静客観的に捉えたい¹⁾。戦後の前提とは昭和20年8月を歴史的断絶と捉える視点、すなわちそこを歴史的起点として戦後美術教育史を構想する視点、教育理念における科学合理主義・民主主義・人間主義といった価値を自明とする視点である。これは何もそれらを否定するのではなく、それらを括弧に入れて相対化することである。

① 冷静に見れば昭和16年に美術教育内容の急激な高度化があり、それが戦後に継続している。戦後に戦時的題材はなくなったとはいえ、戦後的な美術教育は戦時下で始まっている。児童尊重の明瞭な意識も発生している。他教科の有力な実践者たちも戦時体制下で教科教育の大きな転換があつたとしている²⁾。逆に教育内容は混乱・低下したかもしれない。戦前のほとんどの教員が戦後に継続したのであるから、敗戦への反省が断絶をもたらしたと強調するのは現実を見誤る。多くの人にあつた戦前の超越的価値が空白となり、その空白を先の科学合理主義・民主主義・人間主義が埋めた。現在、それらの価値は現実によって虐げられている。

生産社会・消費社会・高度情報社会という社会史区分に見田宗介・大沢真幸のABCの戦後社会区分を勘案する。

1. 生産社会 昭13～51 戦後前期 A理想・夢の時代 ①戦時下 ②生活 ③創造認識造形 ④系統

2. 消費社会 昭52～平1 戦後後期 B虚構の時代 ①感性 ②意欲 ③表出

3. 高度情報社会 平20～ 現在 C不可能性の時代 現実への逃避 ①脱表出

以上のようにすると戦後絶対論から脱し、現在の課題も見えてくる。すなわち、未解決問題を完結させる供養としての美術教育史、超越的なものの回復、高度情報に対応する美術教育などである。

② 戦後美術教育における問題群を暫定的に以下のように捉える。もちろんこれらは相対的に独立しているだけで、現実や研究においては、入り混じっている。

哲学・思想位相：美術教育学 美術教育思想 美術教育思想史 など

社会・制度位相：美術教育史 美術教育制度 学習指導要領 など

組織・運動位相：民間教育運動 地方美術教育 数量的運動把握 など

教材・素材位相：美術教科書 美術教育教材 美術教育素材 など

1) 金子一夫「戦時下図画・工作科の美術史的位置—通念的戦後像から生産・消費社会像への転換」『美術教育学』45, 2024, pp. 91-102.

2) 岩浅農也『教科教育の百年』明治図書出版, 1973.

書評 Book Review

編著：三澤一実，発行：武蔵野美術大学出版局，2024 年 7 月（初版），全 191 頁，ISBN9784864631662

造形実験—新しい美術の授業を始めよう！

山木朝彦（鳴門教育大学名誉教授）

教育理論と教育実践はもともと分離し難く有機的に結びついたものであり、教育実践から理論が美しく截然と析出されるわけでも、教育理論から教育の実践が導き出されたり、産まれたりするわけでもない。前者も、後者も注意していないと、実践家は実践家で理論化を図ろうとすると前者のような思考法に陥り、理論家は理論家で後者の思考法から実践現場に自らの理論を持ち込もうとしてしまう。すでにお気づきの通り、この実践家・理論家という分類そのものが、高度情報化社会における現代では、噴飯物の二分法であり、いわばお伽噺的な空虚かつ滑稽な概念であり、理論家＝実践家でなくてはならない。ならないという言い方も奇妙な表現であり、実践家は必然的に理論家であり、理論家は必然的に実践家であると言えよう。

こんなに口幅ったいことを冒頭に述べたのは、この『造形実験—新しい美術の授業を始めよう！』が、授業に役立つハウトゥー的題材紹介の本や、他の分野から借用した受け売りの学術的装いに包まれた、美術教育のいわゆる専門書ではないからだ。今日まで、理論と実践を結びつけたと称する美術教育の本は数多く現れたが、そのほとんどは、できあがった新学習指導要領か、その上位概念に当たる教育課程に関わる考えを「専門的知識」と見做したり、流行りの教育運動を「理論」と称し、その括弧付きの理論なるものに整合する題材を手際よく紹介したりするものばかりであった。

編著者、三澤一実（武蔵野美術大学教授）はこれら、理論と実践の分離を隠す常套的な手法を厳しく斥け、美術教育のほんものの理論とは何か、そして、理論と分かち難く結びついている実践とは何かを本書の中で、追いつけている。もちろん、教科としての美術の根拠付けとなる学習指導要領の本質を見抜く努力は怠らないが、その成立過程に深く関わった者としての批判精神と分析力を随所に発揮している。

包括的に評するならば、まさに、この書籍の企画そのものが大いなる「実験」なのであり、その実験から得られた成果は計り知れない。この本の帯には「造形実験は臨床から生まれた理論であり、学校における美術の授業はこれから、未来の美術教育を考える臨床となっていく。すべての美術教師は美術教育の研究者であり、日々の授業は豊かな社会を創る研究となっていくのである。」という「おわりに」から転載されたメッセージが載せられているが、まさに授業を臨床的な「知」として定義づける明解な思想が凝縮した言葉である。

「知」と「知識」はほぼ同義だと私は考えている。ゆえに、〈臨床的な知識とは何か、美術における知識とは何か〉という考察が三澤の最大の関心事であり、それはそのまま、美術教育に関わる者が多くを占めるはずの読者層の関心事でもある。少なくとも、私にとってはなかなか解けない謎として、この問いが存在し続けている。

三澤は、この一見、難解に感じられる〈美術における知識〉を、「身体感覚を通して身についた（身体化された）美術の知識」（150 頁）と明解に定義し、もうひとつの〈臨床的な知識〉については、中村雄二郎を参照し「現代の知のあり方が主観を排した近代的科学のみでは先に進まない」（187 頁）位相にあると位置づけている。

もちろん、美術の知識論と臨床の知識論の二つの知識論が存在するわけではなく、それらは個人の体験を基底に置く同一の知識論なのである。この理論的な根拠として挙げられているのが、レベッカ・フィンチャー—キーファアの『知識は身体からできている』（2021 年 新曜社）と渡邊淳司の『情報を生み出す触覚の知性 [副題 略]』（2014 年 化学同人）の 2 冊。どちらも私にとっては難解な本だが、三澤は要点を適確かつ明晰に示してくれているので、細部に捕らわれ過ぎてしまう傾向がある私にとっては、とてもありがたい。そして、前提となるこれらの理論を示した後に、芸術、とりわけ美術と表現の認識論にこだわり続けたエリオット・W・アイズナーの『美術教育と子どもの知的発達』（1986 年 黎明書房）を取り上げることで、造形的な表現活動を継続的に発展させることで、知識が広がり深化するダイナミクスを描き出している。



常に幼児期の無垢という観念に囚われ、その憧憬を露わにする児童観とは決別し、アイスナーを取り上げ、常に拡充せずにはいられない知識獲得の動的プロセスに着目する三澤の姿勢には、20年以上、公立中学校の教員として、人間の成長を見守り、さらに大学生の教育・研究に邁進してきた三澤の教育観が如実に表れている。彼の経験の厚みを通して掴むことができたアイスナーの教育論の本質は、「体験によって身につく芸術的な視点は、世界を捉える視点として人の人生において機能していく」(P.154)という思想である。永続的で発展的な人間の認識力の基礎には、芸術的視点があるということだろう。

三澤が執筆したパート(「はじめに」「造形実験の原点と〔共通事項〕」「造形実験の理論」「おわりに」)は、何れも興味深いテーマを扱っている。アナログ的思考とデジタル的思考についての論述は説得力があり、知的好奇心という焔に油を注ぐ。水平型授業と名付けられた造形実験の授業と従来の授業との比較も有益である。生成AIが普及する時代に人間のイメージ探求能力はどうあればよいかという課題意識も切実である。さらに、教師自身が臨床的な知識を獲得する具体的な方法についてなど、有益なアドバイスも随所に散りばめられている。

編著者である三澤一実のパートの素晴らしさを書き連ねてきたが、当然のことながら、彼と共に「造形実験」とは何か、そして、美術の授業を通じて意味ある思考力を学習者に獲得して欲しいと願う、執筆者全員が真摯であり、魅力的な授業論、思考論、学習論を展開している。

東良雅人[ひがしら まさひと](京都市立芸術大学客員教授)は「〔共通事項〕と造形実験」の題目の下に、知識基盤社会の中での美術科の造形的な視点とは何かというテーマを詳述している。結論部分では造形実験の学習構造について説き、それが「課題把握」「実験」「研究発表」という3つの活動で成り立っているという新たな学習論を提示している。そして、彼の論考は、三澤と同じく生成AIが普及する現代に、コンピテンシーベースの学習観をどのように形成すべきかという課題意識に貫かれている。

小山[こやま]美香子の「造形実験で『愛』について考える」という章には、「造形実験」なるものの具体的な活動の流れが写真と文章で示されている。このように言うと、その流れは、一定方向に進展し、分節化されていると誤解されそうだが、そういうことではない。同調することに慣れ親しんできた集団が、個々の発想が赴くままに突き進むという理想のプロセスを通じて、主体性の獲得に至る道筋を描き出しているのである。

小西悟士[さとし]の「造形実験で『緊張感』を考える—3年間の軌跡」は、試行錯誤の過程を重要視する。概念を掴む試行錯誤、視覚的なイメージを掴む試行錯誤、描画や写真や映像による試行錯誤、探究した成果を発表に纏めるための試行錯誤・・・これらの試行錯誤こそ、「造形実験」の核心部となる経験の層である。

田中真二郎の「素材体験と造形実験」は、「と」(=&)で繋がれた2つの概念の違いを整理している。素材体験は、表し方の実験で、造形実験は考え方やイメージの拡張に関わる実験である。踏み込んで言うならば、前者は創造的に表すために必要な技法獲得の体験であり、後者はテーマを自らの表現とするための、あるいは、自らのテーマを生み出すためのイメージと結びついた造形言語獲得の体験である。授業に即して、この2つのフェーズを描写していることに大きなメリットを感じた。

大黒[だいこく]洋平の「母島での造形実験の取り組みから」は、大黒が小学校の図画工作と中学校の美術の指導を兼務する立場になったことから始まった取り組みである。小学校と中学校の教科を繋ぐ教育課程を構想し、そのなかで造形実験を行う計画を立案した経緯と授業の記録が述べられている。共通事項の捉え方が適確である。

南 弥緒[みお]の「造形実験に挑戦!」は、造形実験の成果報告となる報告会で、中学2年生5名と3年生1名が発表したスライド的なフォーマットに基づく内容を復元したかたちで掲載し、その前後に授業の題材名や流れなどの説明が加えられている。解説から、タブレット端末を自由に使いこなせる生徒達だと言うことがわかるが、それにしても、非常に洗練された図像の使い方、分析的な批評能力に満ちた簡潔な文章、全体として浮かび上がる造形言語に対する学びの深さはまさに驚異的である。

高安弘大[ひろとも]の「造形実験のアプローチによる鑑賞」には、個々の生徒の主体的な学びの理想を追究する活動の流れがリアルに描かれている。美術作品の選択や関連情報を獲得するプラットフォームをネット上の美術館サイトに設定するなど、最小限の条件はあるものの、生徒の活動は実に滑らかで、ひとつも無理がない。自ら選んだテーマに沿って、楽しく、作品の鑑賞を行う様子が目に浮かぶようである。生徒同士の意見交換や批評的活動も十分に含んだ魅力的な「造形実験」のプロセスである。

鈴木彩子[あやこ]の「指導のつまづきと教師の成長」は、生徒の実態に照らして、自分が構想する「造形実験」はハードルが高すぎるのではないかという不安や疑念を持っていたという吐露から始まる。そこから、教師自身が「造形実験」の「考えるために表現すること」の楽しさや大切さに気づくまでの道のりが語られている。

総括的に言えば、あらゆる思考の深化には試行錯誤によって得られた情報のフィードバックが必要だ。その意味で、美術教育の新たな実践=理論を企図して書かれた本書のキーワード「実験」にこそ、大きな価値がある。

新刊案内

New Book Release : *The Art of My Teaching in Art Education*

編集：美術教育学叢書企画編集委員会 責任編集：直江俊雄 発行：学術研究出版
2025年1月 ISBN 978-4-911008-34-8

美術教育学叢書4 美術教育学 私の実践技法

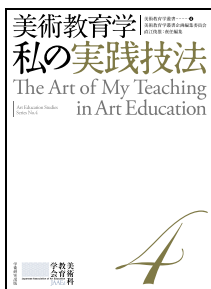
美術教育学叢書企画編集委員会（第3号・第4号担当）

私たちの美術教育実践を語ろう

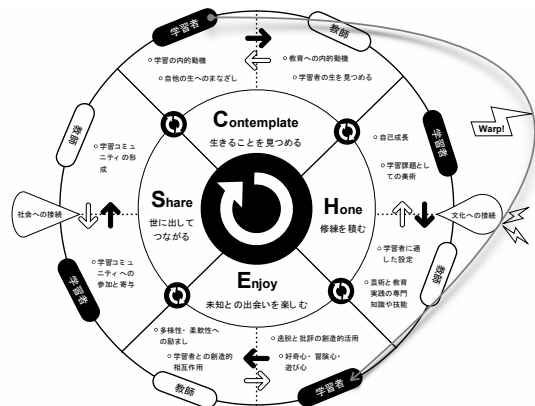
直江俊雄

教育実践への研究者としての関わりは、美術科教育学会のアイデンティティの一つである。

本書では、美術教育研究者が自ら教育現場に立ち、学習者たちの成長を願って日々続けている教育実践の探究を綴った。真摯な教育実践は、新たな研究への萌芽となり、研究的な視点はまた、日々の実践を変えていく。その往還のもつ意義を各著者の実践例から考え、私たちの実践に関する語らいをさらに繰り広げていきたい。



<https://bookway.jp/>
学術研究出版／
BookWay へのリンク



芸術と教育に共通する4つの過程 CHES-AE 芸術と教育のCHESサイクル, CHES Cycle in Art and Education



図5～8: 学生の作品例「場所への応答」,スコットランド,撮影: Glen Coutts

著者	題名	一言概要
第I部 特別寄稿		
秋田喜代美	地域の色から始まる探究学習 新たなクロスカリキュラムの方向性	美術科教育学会リサーチフォーラム講演より,色を出発点として教科や学校の枠を越える教育実践を語る。
第II部 私たちの実践技法		
直江俊雄	芸術的行為としての教育実践	第II部の導入として,芸術と教育の過程に共通するサイクル,CHES-AEを提唱する。
栗山 誠	創造的な居場所としての造形絵画教室の構想と,活動過程の理解に向けて	子どもたちが夢中になって心を輝かせる姿から,視覚的文脈と物語的文脈という研究の視点を導き出す。
小口あや	鑑賞と授業が苦手な私が実践研究者になるまで	美術教育学叢書史上,最も平易で率直な言葉で,小学校教師,研究者,大学教員としての成長を振り返る。
藤井康子	ネットワークで創り出す教育実践研究	大分県の事例から,地域の小中学校と研究機関の連携により実践研究を進める過程とその意義を考察する。
更科結希	子供たちとクリエイティブジャンプ! 今とこれからを創造する中学校美術	生徒が新たな価値を生み出す瞬間,熟考し逡巡する場面など,教師の心を震わせる実践の喜びが伝わる。
片桐 彩	生徒の協働を生み出す映像メディア表現 高等学校教育の現場から	多様な高校での実践から,生徒の意欲を引き出す協働的な学習,国際交流,研究への発展などを語る。
森田 亮	教育実践チームをデザインする 肢体不自由特別支援学校の授業プロセス可視化を通して	建築デザインから教職へと進み,実践の中で人と人との関係性をデザインする授業設計への道筋を探る。
市川寛也	美術教育実践の技法としてのアートプロジェクト 「もうひとつの世界」をつくる	アートプロジェクト「放課後の学校クラブ」などの取り組みを軸に,社会における実践の意義を考える。
相田隆司	教員養成を通して考えること 大学生の授業理解／主体性	授業が教師の価値観と結びついていることを,教職課程の学生に体験的に理解させるための工夫の数々。
内田裕子	疑問の解が紡いだ美術教育研究	「若い時に抱いた疑問は生涯を賭して解決する問題になる」との,幼児期から研究者へと至る人生観。
山田芳明	図画工作・美術の授業実践の特性とその 愉しみ 研究的実践者への誇り	手放し技,題材のタネ,グリップとリリース,授業=ライブ,研究的実践者など,楽しく深い洞察が満載。
三澤一実	振り返ったら研究の道が見えた	「行動から研究へ」の道筋を自らの体験をもとに語り,「造形実験」の提唱へと至る。
第III部 海外教育者インタビュー		
サミア・エルジェイク	織物職人の心をもつ美術教師	アメリカ留学,InSEAなどの国際的経験を背景に,エジプトにおける手織物の教育実践を語る。
グレン・クーツ	芸術家と教育者としての省察	コミュニティ・アーティストから教員へ,そしてInSEA会長としての国際的視点から教育実践を語る。

左上図:表紙カパー 左中図:直江俊雄「芸術的行為としての教育実践」p.32 左下図:グレン・クーツ「芸術家と教育者としての省察」p.185 右表:「はじめに」より各章の一言概要 p.10

→ 次のページでは、本書に携わった叢書企画編集委員
それぞれの視点から本書を紹介する。

『美術教育学叢書4 美術教育学 私の実践技法』新刊紹介 美術教育学叢書企画編集委員（第3号・第4号担当）より

図や写真に込められた知恵や情報

宇田秀士

美術教育実践は、子供、指導者、これらの関係性、環境設定、題材などが複雑に絡み合っていて進んでいくため、それを記録に残し、第三者に伝えていくのは容易くない。この意味で、実践文章を補助する挿入された図や写真には多くの知恵や情報が込められている。本書でも、小口あや氏の「吹き出しシールが貼られた鑑賞おもちゃ」や「手作りワークシート」、藤井康子氏の「生徒が作成した“美”事典」、更科結希氏の「美術の授業展ポスター」などは、実践アイデアの糸口を示してくれている。また、栗山誠氏の「造形絵画教室の環境設定」、片桐彩氏の「生徒の映像メディア作品」、森田亮氏の「支援学校の作品展示」、市川寛也氏の「＜放課後の学校クラブ＞の板書」などの写真は、実践の具体化への大きなモチベーションとなるであろう。創造的な実践者は、子供の今を見つめ、造形・美術活動の面白さを伝えるために、たゆまぬ努力を続けている。本書に刺激を受け、これを乗り越える美術教育実践が生み出されることを期待したい。『実践技法 第二弾』に向けて。

教育の実践・研究の実践

大泉義一

実践とは何だろう。研究においてそれは理論と対立するものとして認識されることがままある。ゆえにこれまでもにおいても永く「理論と実践の融合あるいは往還」といったフレーズで両者の一体性、関連性が強調されてきた。いっぽうで、教育学研究は常に実践に根ざして発展してきたことはまぎれもない事実である。例えば、現在もなお私たちに大きな影響を与えているデューイの研究は、実践を抜きには決して語ることができない。こうした意味において、本書で語られている実践とはすなわち教育の実践であると同時に研究の実践でもある。本書の各論に通底していることは、「省察」であろう。自らの生き方と連係している教育の実践、研究の実践に対し、各著者は必ずその実践の意味を自ら問い、さらなる実践を生みだしている。したがってその技法とは、定型のものを指すのではなく、自身の実践との対話を通じて新しい意味を見出そうとする所作であると言える。その所作の数々から私たちが学ぶものは、教育そのものであり、研究そのもののなのである。

「実践」であること、「私」であること

佐藤賢司

乳幼児の造形表現から、社会教育まで、多様な研究主題を持つ研究者の集まりが私たち「美術科教育学会」です。あえて「研究者」の集まりといったのは、「研究論文を書くもの」「（授業等の）実践をするもの」という区分けをするのではなく、会員すべての取り組みは広義の研究であると考えたいからです（ここで厳密な研究論文の定義の議論を持ち出すつもりはありません）。その中の12名の会員とゲスト執筆者の日々の教育実践や、現在に至る実践の軌跡を共有できる、大変貴重な空間が、この『私の実践技法』の頁を開くと現れます。学会誌等に掲載された論文では見ることのできない、それぞれの「生」な体験の言葉、実践への「思い」は、多くが研究する側の視点と研究対象たる実践者を兼ねた私たち会員一人ひとりにとって、大きな刺激と共感を生むでしょう。編集責任の直江委員長が、3号・4号ともに「私の」という言葉を提案した意味が、本文を読むとよくわかります。他の誰でもない、その人ならではの経験が、そこにリアルにあるからです。学会の財産が一つまた増えました。

大学の授業改善を求める人のために

山木朝彦

長い間、私は大学の講義こそが、これから開拓しなければならない（授業実践）であり（教育実践）の場だと感じてきた。ところが、多くの大学教員が「教育実践とは小学校・中学校・高校までの学齢の学習者を対象にするもの」であり、自分はそのために資する研究を行う「研究者」であると自己規定している。間違いではないものの、そのような硬い枠組みに捕らわれている限り、大学の授業改善は望めない。ストレートに言えば、大学の授業を身近な（教育実践）の場だと認識し、この相対的に見て未開拓な分野について実践の技法を磨くことが、現代の大学教員に求められている。この観点から、『美術教育学 私の実践技法』全体を読み返すと、著者2名が大学の授業を教育実践として対象化し、その授業改善を図っていることが分かる。著者名とその題目を挙げると、相田隆司の「教員養成を通して考えること」と三澤一実の「振り返ったら研究の道が見えた」である。この他に、内田裕子、市川寛也、グレン・クーツが手掛けた各論は、大学の授業改善のヒントが得られる点で、貴重である。

新刊案内

New Book Release : *Current Art Education Practices*

美術教育学叢書企画編集委員会編 責任編集：佐藤賢司 大泉義一 発行：学術研究出版
2025 年 1 月 ISBN 978-4-911008-35-5

美術教育学叢書 5 美術教育 授業の現在

美術教育学叢書企画編集委員会 ※造形芸術教育協議会連携事業（日本美術教育学会・大学美術教育学会 編集協力）

授業実践の「現在」を

佐藤賢司（責任編集）

本書は、小・中学校・高等学校の授業実践、こども園・幼稚園等における保育実践、大学・美術館等における実践などを、その実践者自身の言葉と目を通して共有することを目的に編纂されました。4つの項目で紹介される実践の末尾には、それぞれの「実践・思考のヒント」が示され、読者は実践者が拠り所とする思想や先行研究を知ることができます。また、すべての実践は7つのカテゴリーのいずれかに分類され、読者は校園種を超えた学びの共通性やつながりを探ることもできます。これまでの「題材集」とは一線を画す『授業の現在』は、広く「美術教育の実践とは何か」を捉えなおす契機となることでしょう。（次ページに続く）

本書の構成

1 “世界”を知る

●あそびの材としての絵の具／伊藤裕子 ●なにがでてくるかな／岩本美紗紀・江頭里美（執筆者-塩見知利）●わたしのおへや／川嶋美穂 ●水と泥／横溝綾子・伊勢田一輝・飯田愛梨・藤野佑奈（執筆者-横溝綾子・清水早苗）●黒と白の間にある〰（ムゲンダイ）／宮川紀宏 ●自画像としての靴／花里裕子 ●漢字のある風景／濱脇みどり ●旅してみたいこんな世界／藤井雅美 ●わたしの守り神／志田美晴

2 “形”が生まれる

●見えないものを形に／村井奈津子（執筆者-王寺直子）●水と光のストーリー／秋山道広 ●試考 作 娯：遊ぶように工作しよう／栗津謙吾 ●切ってかき出さずにつけて／伊藤祥子 ●わすれられない気持ち／岩間啓介 ●香りがくれたおくりもの／岡 照幸 ●はこを あけると／岡田三千代 ●カケラ博物館／川真田心 ●どんだん ならべて つんで／高橋結香 ●“学びのもり”の風をとどける／宣 昌大 ●光と影とモノ語り／田窪真樹

3 “私”を可視化する

●見たいゆめの世界へ／木村仁 ●3650 日のたからもの／高橋英里子 ●My Special Avatar／赤羽雄太 ●私を染める、感謝を包む／伊藤慶孝 ●私の中の「わたし」／折戸志帆 ●私との対話／杉坂洋嗣 ●社会へのメッセージ／牟田淑子 ●今、私は……／湯瀬明意 ●数字のない私のものさし／妹尾佑介 ●「この感じ」を表現しよう／益子裕美

4 “みる”を深める

●いろんなようかい大行進！？／有川貴子 ●気配を感じて／市川安紀 ●北さいさんと色水あそびをしよう／野網 学 ●Art or Not Art／大根田友萌 ●かげをつかまえる／武田聡一郎

5 “誰か”を思う

●地域の伝統と生活してみよう／長崎陽日 ●誰かのために花束を／廣川 豪

6 “境界”を超える

●伝えよう！守ろう！ふるさとのお宝 大日如来坐像／島口直弥 ●“がさごそ”にいのちをふきこむ／城野知佐 ●駄菓子屋さんをつくらう！／山内佑輔 他（執筆者-山内佑輔）●小中大連携による図画工作・美術の授業研究：「試み」から導く表現／大塚智大・浅野比呂嗣（執筆者-本田悟郎）●私の言葉と造形の出会いから～／足立 彰 ●「美ってなんだ？」発見！私の美／土本周平 ●プロセスのデザイン／今井正道・山岡佳代・岡田賢二・市川和貴・松本研太 ●令和の金屏風をつくる／大橋里沙

7 “社会”をつくる

●「いらっしゃいませ！」「おいしいね」の聲が響く対話の実践／今枝加奈子 伊藤優那 ●想像してみよう未来の町／下平華穂（執筆者-王寺直子）●造形が結ぶ子どもの世界／畑山未央 ●わたしのまちに棲む妖怪／尾上佳代子 ●和紙とアカリ／市村千咲 ●人と鳥の共生を目指して／志藤浩仁 ●高島市を楽しんだり、安全にしたりする看板を作ろう！／堤 祥晃 ●場所を思う一私と色とかたちの表現／長友紀子 ●街をデザイン（語り部としての美術）／野田洋和・宮川拓

対談「授業・実践を語ること、そして共有すること」をめぐって 佐藤賢司・大泉義一



A5 サイズ 252 ページ
本体 2,200 円+税

Bookway のサイト（下記）では 30 頁分立ち読み可能。Amazon でも購入できる。

https://bookway.jp/module/s/zox/index.php?main_page=product_info&cPath=193&products_id=1612

なお、本書は、造形芸術教育協議会(本学会、日本美術教育学会、大学美術教育学会の三学会による協議会)の連携事業としても位置付けられます。基本方針と全体構成・実践カテゴリーの策定・ページ構成要素と基本レイアウトなどは我々責任編集が行い、日本美術教育学会と大学美術教育学会、および本学会の授業研究部会と乳・幼児造形研究部会には、実践者の推薦を依頼しました。これらをあわせて54件の実践が集まりました。

本書には、実践者がどの学会からの推薦かはあえて記していません。それは本書の趣旨にとっては不要の情報であり、大事なことは、三つの学会が垣根を越えて厳選した「今、共有したい実践者による実践」がここに集まっているという事実です。

思いをもって執筆いただいた実践者の皆さんには、最大限の敬意を表します。また、造形芸術教育協議会の編集協力と、緻密な編集・校正作業を献身的に進めてくれた責任編集の大泉義一先生、編集協力の新井馨先生には、心からの感謝を述べたいと思います。

多くの方が、本書の頁を開いてくれることを願います。未来のために“授業実践の「現在」”を共有しましょう。

授業をつくり支えているもの

大泉義一(責任編集)

本書は、いわゆる題材集ではない。題材集とは、ある特定の地域の教師が目目の子どもたちとともに取り組んできた固有の意味を持つ教育実践の事実を(かなり)抽象化し、その事実を知らない第三者に伝えるものである。この「抽象化」において、授業という実践からは大事なものが抜け落ちることを我々は自覚すべきである。本書は、その自覚に基づき執筆され編集されたものである。ではその「大事なもの」とは何か?最も重要なのは、実践者の子どもに対する「願い」であり教育信念である。これらがまず在って成立する固有の実践の価値が、本書には示されているのだ。そうした意味において、本書に記されているのは、実践の「記録」でも「報告」でもなく、「語り」である。語りには、話者の主観すなわち情感とともにある事柄が自ずと他者と共有される。そこには実践の「質」が存在している。アイスナーは、我々教師が持つべき「教育的鑑識眼」について次のように述べる。

「学校がどのようなものか、その長所と短所を知るためには、学校で何が起きているのかを見取る必要がある。また、見取ったことを、鮮やかに洞察力に満ちた方法で他者に伝えることができなければならない。」(『啓発された眼』より) 本書は、まさに実践の「質」を見取ることを我々に促す。そのために、「題材名」「活動の概要」「展開モデル」「材料用具」といった事実とともに、実践者の「願い」や教育信念を指し示す「ノート」、さらにそれを支える「実践・思考のヒント」として文献が紹介されている。また巻末では、責任編集担当の佐藤賢司先生と大泉とが「授業・実践を語ること、そして共有すること—をめぐって」と題して対談を行っている。上述したような本書のコンセプトが語られているので、各実践の「語り」を読む前にお目通しいただければと願う。

つくること・みることの ethics—美術教育における創造—

新井馨(編集協力)

本書『美術教育学叢書 5 美術教育 授業の現在』において、私は編集委員長のご指名を受け、編集協力の一端を担わせていただきました。編集という立場から、本書が形を成していく過程を間近に見つめ、ときに対話を重ねながら、その構築に微力を尽くせたことは、私にとってこの上なく貴重な経験でありました。

とりわけ心に残っているのは、校正作業に携わる中で、気づけば手を止めて読みふけていた自分の姿です。就学前教育・保育施設から高校まで、実に多様な校種における豊かな実践の数々は、それぞれが一篇の物語のように生き生きと立ち現れてきました。そこには単なる授業技術や構成を超え、子どもたちとの日々の関わりを通じて紡がれてきた、厚みのある時間の蓄積が静かに息づいており、その背景までもが行間から伝わってくるような、深く染み入る読後感がありました。

また、執筆者の先生方の原稿から、「子どもが『おもしろい!』と思う活動・授業をしたい」という真摯な思いが行間から伝わってきました。その情熱は、時に孤独になりがちな私自身の研究の日々を支えてくれる、何よりの励ましとなりました。

本書の章区分タイトルをあらためて眺めてみると、そこには「子どもがつくる」「つくりかえる」「みるなかで生まれる」といった創造のプロセスが、全体を通して一連の流れとして浮かび上がってくるように感じられます。こうした連続的な営みは、まさに造形教育において育まれる創造性の姿そのものであり、創造とは単なる表現行為ではなく、つくり、変え、観ることを往還しながら生まれていくものであることを、章の構成自体が静かに物語っているように思います。

本書を手にとってくださった皆様にとって、この一冊が美術教育の豊かさと奥行きを再認識し、新たな実践や対話の契機となることを、心より願っております。

第48回 東京(早稲田)大会予告

Notice of the 48th Conference in Tokyo (Waseda)

第48回 美術科教育学会 東京(早稲田)大会

大会実行委員長 大泉義一(早稲田大学)

すでにお知らせしている通り、本年度(2025年度)の研究大会は東京で開催されます。会場は、早稲田大学(早稲田キャンパス)です。美術教育で初の早稲田での開催となる本大会の開催に向け、すでに実行委員会が発足し、準備が進められています。

現段階で予定している内容をご案内申し上げます。開催期日は下記の通り、2026年3月14日(土)・15日(日)に決定いたしました。ぜひ、今からご予約いただければと思います(スケジュールに☑)。多くの方々の研究交流の場となることを祈念しております。実行委員会メンバー一同、東京・早稲田でお待ちしております。

1. 開催期日(決定)

2026年3月14日(土)・15日(日) (13日(金)理事会)

2. 開催方法

対面開催(感染症流行の際はオンライン開催に変更)

3. 会場

(1) 研究大会会場

早稲田大学 早稲田キャンパス 14号館 小野梓記念講堂

〒169-8050 新宿区西早稲田 1-6-1

(早稲田大学) <https://www.waseda.jp/top/>

(早稲田キャンパスへのアクセス) <https://www.waseda.jp/top/access/waseda-campus>

(キャンパスマップ) <https://waseda.app.box.com/s/sr4l9i4ub4ai87fox7akj19a0umwad65>

(2) 懇親会会場

早稲田大学 大隈ガーデンハウス2階(早稲田キャンパス内)

4. 大会テーマ

美術教育と未来 Art Education and the Future

5. 内容(予定)

【3月14日(土)】

9:30~12:20 口頭研究発表 14号館各教室

12:20~13:20 昼休み

13:20~14:10 開会行事・総会 14号館101教室

14:10~17:10 国際局による国際シンポジウム 14号館101教室*

17:10~18:40 研究部会 14号館各教室(5会場)

19:00~21:00 懇親会 大隈ガーデンハウス2階(早稲田キャンパス内)

【3月15日(日)】

9:30~12:00 全日本美術教育会議との共催によるシンポジウム 小野梓記念講堂*

12:00~13:00 昼休み

13:00~16:25 口頭研究発表 14号館各教室

※ *の企画は入れ替わる可能性があります。

※ さらに実行委員会企画の挿入、海外からの口頭発表も行う予定です。

6. 今後の予定

・大会ホームページ開設・公開 9月~10月ごろ

・参加・演題登録、懇親会申込 11月ごろ~1月

・概要集原稿提出 ~1月末

7. 参加費 未定



夜の早稲田キャンパス



小野梓記念講堂



WASEDA BEAR

■ 本部事務局メンバーが交代しました

第13期役員選挙による理事の改選を経て、本部事務局のメンバーが交代いたしました（次頁の一覧をご参照ください）。前・本部事務局を担っていただきました理事・本部事務局員の皆様より業務を引き継ぎ、円滑な学会運営を進めて参ります。どうぞよろしくお願いいたします。

■ 2025 会計年度までの会費納入をお願いします

「2025 会計年度会費」は、2025 年7月末日までに納入いただくようお願いしています。3月の大会、リサーチフォーラム、学会誌刊行などの学会運営は、会員の皆様の会費により運営されています。ご自分の各年度の年会費納入状況については、以下の「会員 情報管理システム」にログインすることにより確認が可能です。

<https://service.gakkai.ne.jp/society-member/auth/AAE>

なお、納入状況に疑問がある場合には、下記の本部事務局支局アドレスにお問い合わせ下さい。

＜留意事項＞ 学会誌への投稿並びに大会での口頭発表に際しては、投稿や申込みの時点で以下の2つの条件を満たしている必要があります。

- ① 会員登録をしていること
- ② 当該年度までの年会費を全て納入済みであること。
* 会費を2年間滞納した場合は、会員資格を失います。

【会費納入に関するお問い合わせ先】

(株)ガリレオ 学会業務情報化センター 担当 和久津君子
[窓口アドレス] g030aee-mng@ml.gakkai.ne.jp

■ 会費振り込み口座名・番号

会員の皆様に送付される振込用紙、郵便局にある払込用紙または銀行等からの振替により下記の口座に納入してください。

- ・銀行名： ゆうちょ銀行
- ・口座記号番号： 00140-9-551193
- ・口座名称： 美術科教育学会 本部事務局支局

通信欄には、「2025 会計年度会費」等、会費の年度および会員 ID 番号を記入してください。また、ゆうちょ銀行以外の銀行からの振込の受取口座として利用される場合は、下記内容を指定してください。

- ・店名(店番)： 〇一九(ゼロイチキユウ)店(019)
- ・預金種目： 当座 ・口座番号： 0551193

現在、会費のクレジットカード払いに対応する準備を進めています。詳細は、一斉配信メール等でお知らせします。

■ 住所・所属等変更、退会手続き

住所、所属先等に変更のあった方は、すみやかに本部事務局支局までご連絡ください。

退会を希望される場合は、電子メールではなく、必ず文書（退会希望日を明記してください）を郵送にて、本部事務局支局宛にお送りください。あわせて、在籍最終年度までの会費納入完了をお願いします。

【住所・所属等変更、退会手続きに関する連絡先】

美術科教育学会 本部事務局支局
〒170-0013 東京都豊島区東池袋2丁目39-2-401
(株)ガリレオ 学会業務情報化センター 担当 和久津君子
[窓口アドレス] g030aee-mng@ml.gakkai.ne.jp

■ 学生会員移行申請について

既に美術科教育学会の会員で、学生会員への資格変更を申請される方は、学会ウェブサイト <http://www.artedu.jp/> のメニュー「JAAEd 会員 > 入会」より「学生移行申請」書類をダウンロードし、必要事項をご記入のうえ本部事務局支局宛に郵送してください。

＜学生会員について＞ 学部・大学院の正規課程に在籍する学生が対象で、在職の有無は問いません。ただし、聴講生、研究生、科目等履修生は対象外となります。

■ 新入会員

2024 年9月7日の第1回理事会以降、2025 年3月10日までに入会申込書が受理され、第2回理事会で入会が承認された方々は下記の通りです。

三木 麻郁・田村 佳文・下平 怜那・入谷由喜子・木村 仁・西丸 純子・豊岡 大画・笠原 未帆・赤石 賢也・溝上 怜海・大久保範子・木村 健

■ 学会通信（佐藤絵里子）

年間3回の刊行（6月、10月、2月頃）を予定しています。紙面には、学会からのお知らせのほか、会員の皆様からの原稿を随時掲載します。寄稿のご希望があれば、発行日の2か月前までにお知らせください。

■ リサーチフォーラム（大泉義一）

リサーチフォーラムは学会主催として、研究発表・シンポジウムを実施する場です。募集等詳しくは学会ウェブサイト <http://www.artedu.jp/> のメニュー「リサーチフォーラム」をご覧ください。

■ 学会ウェブサイト（手塚千尋）

美術科教育学会ウェブサイト <http://www.artedu.jp/> には、随時、学会からのお知らせを掲載しています。研究会の開催告知等の掲載を希望される場合は、本部事務局までお知らせください。

■ 一斉配信メール

年3回刊行される学会通信が公開された際に一斉配信メールにてお知らせします。g030aee-galileo@ml.gakkai.ne.jp より配信しますので、受信できるよう設定を再確認いただきますようお願いいたします。また、必要に応じて学会通信ではカバーできない案内をお伝えしていきます。一斉配信メールは、状況に合わせて柔軟に配信します。

美術科教育学会 本部事務局
Secretary Office
Japanese Association of Art Education



- 〒582-8582 大阪府柏原市旭ヶ丘4-698-1 大阪教育大学
佐藤賢司（代表理事/教科教育学コンソーシアム理事） ksato@cc.osaka-kyoiku.ac.jp
渡邊美香（本部事務局理事/会員名簿） mwatanab@cc.osaka-kyoiku.ac.jp

- 〒630-8528 奈良県奈良市高畑町 奈良教育大学
竹内晋平（総務担当副代表理事/本部事務局長/庶務・会計・規約） shimpei@cc.nara-edu.ac.jp

- 〒338-8570 埼玉県さいたま市桜区下大久保255 埼玉大学
内田裕子（本部事務局理事/会計・会費管理） yuchida@mail.saitama-u.ac.jp

- 〒108-8636 東京都港区白金台1-2-37 明治学院大学
手塚千尋（本部事務局理事/学会ウェブサイト） tetsuka@psy.meijigakuin.ac.jp

- 〒036-8560 青森県弘前市文京町1 弘前大学
佐藤絵里子（本部事務局理事/学会通信） eriko0220@hirosaki-u.ac.jp

- 〒739-8524 広島県東広島市鏡山1-1-1 広島大学
池田吏志（研究担当副代表理事/学会誌編集委員長） ikedas@hiroshima-u.ac.jp

- 〒169-8050 東京都新宿区西早稲田1丁目6-1 早稲田大学
大泉義一（事業担当副代表理事/リサーチフォーラム統括/8団体連携会議） oizumi@waseda.jp

- 美術科教育学会 本部事務局 支局
- （株）ガリレオ(<https://www.galileo.co.jp/>) 学会業務情報化センター
〒170-0013 東京都豊島区東池袋2丁目39-2-401
（担当者 和久津君子） TEL 03-5981-9824 FAX 03-5981-9852 E-mail g030aae-mng@ml.gakkai.ne.jp